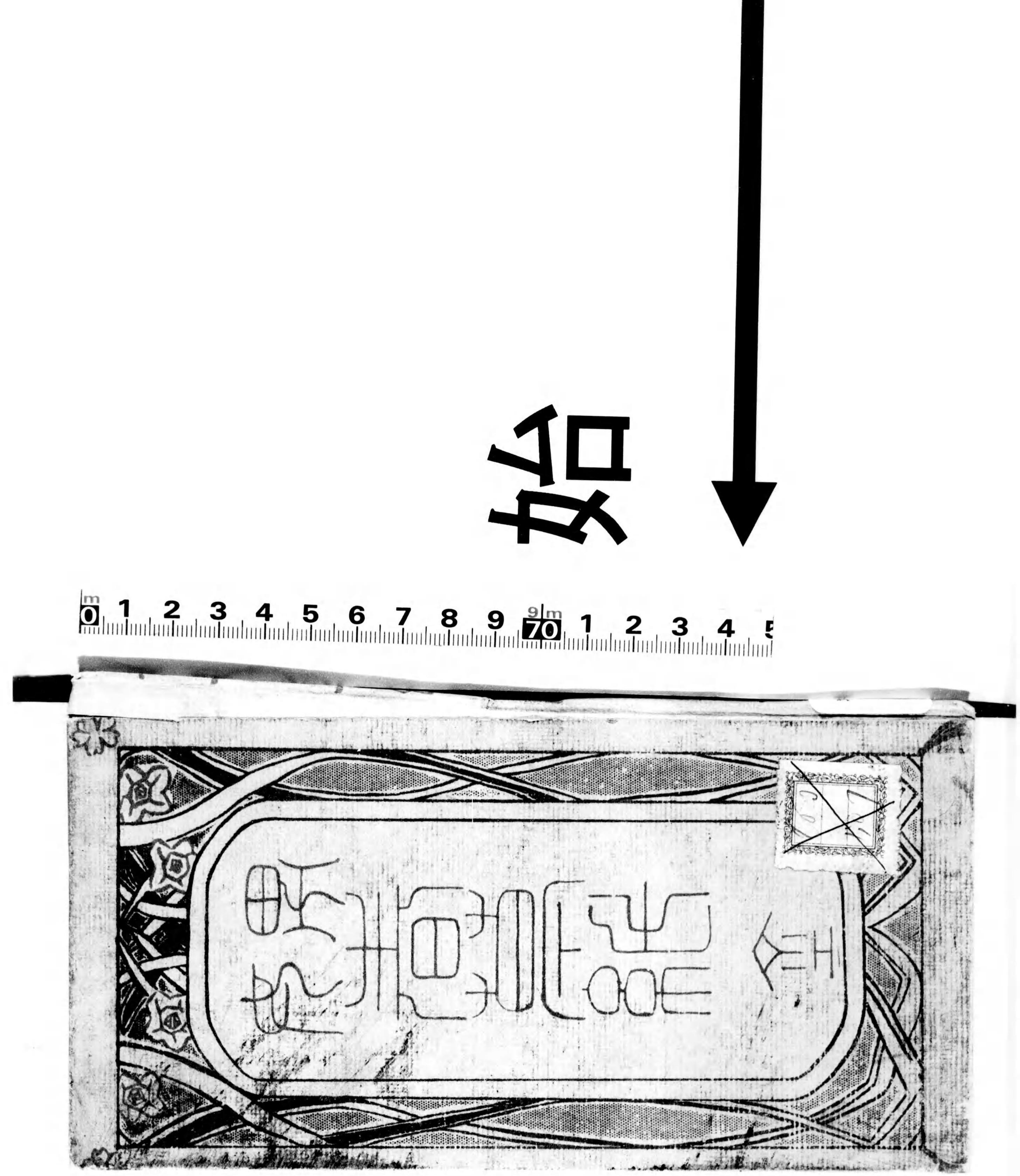


本書著作時間三年ニ亘リ

本書ノ紙數表紙ヲ除キ三百十餘頁

内日本紙彩色繪十二枚

4寸106
4401

塚田靈翠女史著

男女春草紙

東京　春秋庵發行

大正
6. 1. 31
内交

國民思想試驗に就て

（我官民以て如何と爲す？）

大中小學校內の大童小兒を敎育し試驗する事は所謂敎育界に於て之を爲せども、校外なる天下幾萬の靑年壯老者を自省せしめ思想界の向善試驗を執行するの公機關未だ之れあらず、又斯る事に巨財と心血の勞を吝まざる眞の憂世想國の士尠く、恬として省みざる者多きは是れ實に國家の一大恨事ならずや

我庵夙に現代の思想界を憂ふるの餘り、別記問題中の二問を從來廣く天下の新聞紙上に揭げて世に問へり、而かも廣告料の高價は吾人の借財を以てしても吾人の慨志を充分に記述せしめ得ざりき、依て今亦左の方法を以てせんとす、乞憂國慨世の士女陸續御答稿あれや！

（一）當庵扱ひの圖書を購求せし人に限り答稿の權利あるものとす

(二)別記の問題に對し答稿者中の入選者へは左の賞品を與ふ

▲優等賞（大和心の紀念盃壹個）

▲一等賞（安心生活法壹册）

▲二等賞（護身術壹册）

▲三等賞（今上天皇陛下御宸筆印刷掛軸用）

(三)答案を調査の上、入選者へは一ヶ月以内に送賞す（其間通報せず）

(四)入選せざる稀れなる人へは賞與も通知も發せざるものとす

(五)入選の通知費は當庵の負擔とし、賞品の送料は入選者の負擔とす

國民思想試驗問題

（第一問と第六問を除くの外皆簡潔に要領を記すること）

(一)生きて居る內の樂みは何でせう？

（日本臣民として最善高大の樂みを論文的に記述すること）

(二)獨身者も夫婦者も「男女春草紙」を見ては如何？（可否一語）

(三)圖書の眞價は洋紙の數に在りや又は其著の眞髓に在りや如何

(四)實地敎場だも設け無き或洋紙販賣主義者が、講義錄と名づけたる洋紙を賣るに田舍人を釣り、誇大なる建築物を成す程の暴利を得る者は、厖大なる廣告と學會てふ名稱を以てする由なるが、斯る行爲を我官民は默過して可なるものなりや如何？又斯る學會屋の會長と云ふ名義にて賄賂を取る僞政治家ありとせば其人格や如何。

(五)敎師の實體も音聲も無き非敎場の自宅に於て唯洋紙を活字に染めたるものを一二

年間見れば中學五年卒業程の力あり、などゝ誇大以上の僞大なる廣告を爲す耶魔師の大惡漢ありとせば、我官民は其を膺懲もせず許し措き可なるものなりや如何。

(六)我法治國には久しき以前より淫猥畫の販賣を禁ぜる法律あるの今日!!此法律無きが如くに無視して!!「現代に淫猥なる圖書を公然廣告して販賣するならん」!!と思へる醜猥思想者あらば其法律無視の墮婦墮漢に左袒するの可否、及び斯る墮者を自省せしむるに足るべき方法を記せよ。

(七)人の性格は其親しむ所の圖書に因りて判明するものなるが、醜猥なる圖書に親しむ人と敬神尊皇的の圖書に親しむ人とは其性格何れが高潔なりや、何れが卑醜なりや。

(八)物品の所有權は「金錢と物品との交換を終りたる時に於て所有者が確定す」との意義ある法律を遵奉するの可否。

本書の著者

序

世に學校なるものありて校内の男女生に訓へ、世に思想上の圖書ありて校外の青年壯老者に讀ましむと雖も、其多くは餘りに高蘊に偏せざるものは卑猥に流れ易く、甚だしきは墮味を趣味と誤り、隔然たるべき男女の文字を醜想的解釋に終らしむるなど、敢て善良の趣味感化を與ふるもの尠きの今日、塚田靈翠女史之れを慨して、現代の假想善行爲を本書に著はし予に序を求む、一讀すれば滿卷是れ赤き心の血を忌憚なく

吐露して世をも人をも覺醒せしむるの觀あり、其文章の流麗なるは恰も古の源氏物語文も左こそと推せられ、其俗訓的の裡に大ひに敬神尊皇愛國の大義を含說しあるは、古今女性の作としては多く見ざるの珍書なりと信ず、敢て天下幾萬男女の修養的參考書として精讀し、以て各自高潔なる趣味を養成するに足るべきものと認め、茲に此序を呈す

大正五年六月

從五位勳五等　北原種忠

序

人ハ時流ニ倣ヒ軟風ニ醉ヒ、世ヲ擧ゲテ滔々名利ニ趨ルノ時、人心ヲ指導スベキ圖書ノ內容亦俗醜ニ媚ビテ唯讀者ノ歡心ヲ得ンコトニ努ムルモノ多ク、時ニ思想界ヲ向善ナラシメントスル著者發行者及ビ著書無キニ非ザルモ、敢テ不健全思想者ノ讀否ヲ顧ミルノ親切無ク、徒ラニ表題ニマデ堅實ヲ誇大ニ衒ヘル書名ヲ附シ、以テ或思想ノ徒ヲシテ折角ノ良書ニ接スルノ機會ナキニ到ラシメ、爲メニ良書ノ

目的ヲ達シ得ザルモノ多キノ觀アリ、會々現代ノ女傑塚田靈翠女史、眞ヲ罩メタル國文ノ一著ヲ成シ予ニ序ヲ求ム、通讀スルニ滿卷悉ク是レ敬神尊皇愛國ノ至誠ヲ吐露セルモノニシテ良藥的趣味津々タリ、而モ其表題ナル書名ニ堅實ヲ誇示スルコトヲ爲サズ、**外柔內剛**ハ女史ノ性格ニヤ、最モ謙讓和樂ナル題名ヲ附セラレタル其間ノ消息ヲ洞察スルニ至ツテハ、如何ニ本書ノ著者ガ世ヲ憂ヘ上下ノ心界ヲ矯メ救ハンコトニ腐心セルカヲ想到セシメテ肝ニ銘スルノ感アリ、幸ヒニシテ我官民一致至誠ノ力ヲ協セテ、生ケル人類ノ各戸ニ本書ヲ備ヘシムニ至ラバ、蓋シ世ヲ裨益スルコト尠少ニ非ザルベキヲ信ズ

大日本帝國愛國同志會

主幹　寺島天園

自序

春は來りぬ。若緑に迷ふ鶯は霞の空に啼きかへり、眞白き光は新春の天地を隈なく照らし、萬花何れも芳香を放ちて笑ひ初めぬ。麗らかに澄める美空にそよ吹く風も坐ろ心地長閑けし。雪と寒さに縮みし人の心も、潜みし一切のものも、春の曙光に照らされ氣に觸れて、誰れか心身共に伸びざる。不肖此の季に當り豁然として悟る處あり、深夜双手を組みて、靜かに現代の風潮思想界上に思を遣れば、轉だ慨嘆に堪えず、

世の總ての人、若し濁りなく清く正しくありなば、敢て小婦の筆草を待たずとも可かるべきに、噫如何にせん、幾多の青年男女壯老者、身苟しくも世界心靈界の本源地たる此皇土に生を享け、而かも世界に誇るべき本邦固有の大和魂を有すべきに、動もすれば神道正義の觀念を失し、健實の思想缺之して、或は奢侈に流れ、輕佻浮薄に陷り、徒らに軟文思想に迷醉するあり、或は酒色に耽り、身と家と國家社會とを毒するの墮漢墮婦あり。如何にして此の退歩し腐敗せる忌はしき思想界を矯正すべきか、稀に見る憂國の士は身をも家をも顧る

の遑なく、國家社會の爲めに日夜寢食を忘れて奔走す、不肖深く慮ふる所あり、現代の風潮を慨して、男女の心の最も搖るぎ易き春季の心得にもと、獨り春夜草せるものあり。題して春草紙と名づく。素より學淺く智乏しければ思ふ處も充分に表はし得ざるを遺憾とすれども、赤心の發露を以てせる本書、聊かにても世道人心をして稗益するものあらば、我が微衷は既に達せりとして世と共に喜ばんのみ。

大正丙辰の晩春　　靈　翠　識

凡例

(一)本書ハ一般青年男女ノ修養ニ資センガ爲メ、乃至ハ思想界改良ノ一端ニモトノ考慮ヲ以テ、且ツ美文應用界ノ被評材料タルヲ自任シテ著作セルモノナリ。

(二)本書ハ現代ノ風潮ヲ慨シ、社會裏面中ノ善行ヲ模範トシテ物語的ニ假想著述セシモノナレバ、成ルベク枕離レシ所ニテ姿勢ヲ正シクシテ讀マレンコト、之レ著者ノ衷心希望スル所ナリ。

(三)本書ハ春夜筆草セシモノニシテ、夏秋冬ノ三季節ニハ餘リ緣故ナク、材料ノ多クヲ春季ニ因ミテ著述セルモノナレバ當然春草紙ト名ヅケタリ。

(四)本書ノ作畫ハ青年思想畫家渡邊靜觀先生ガ、半歲ノ精丹ヲ凝ラシテ眞ヲ罩メタル思想畫ナリ。

男女 春草紙目次

第一章　下女と旦那……一
第二章　藝者と醉客……十
第三章　女學生と角帽……一七
第四章　看護婦と病客……三五
第五章　女將と番頭……四三
第六章　僧侶と後家……五三
第七章　女教師と男教師……六三
第八章　海員の妻と吳服賣男……七七
第九章　文士と女優……八七
第十章　奥樣と車夫……九五
第十一章　大臣と小間使……一〇九
第十二章　醫者と患者……一二一
附錄　文語と思想

繪一圖

第一章　下女と旦那

庭園の梅花美しう微笑みて、谷の戸出でし鶯の初音床しく春謳ふ彌生の初旬、日當りよき南庭の隅に、未だ冬氣抜けぬ朝風を受けて此の家の女中は、見るも殊勝らしき赤襷に白の前垂れ掛け、衣の裾を端折り、大いなる盥運び來りて井戸の眞清水小氣味好き迄にキビ〳〵と汲み上げつ、主人や坊ちやん嬢ちやん等の衣服其他一切の汚れ物を、洗ふ水音サバ〳〵と四邊に響き、勞働の神聖を歌ふ其聲と相和していと樂しくぞ聞ゆ。

此の家婢は、年いまだ若く、さしたる學校教育とては受けねども、緊要なる家庭教育

の善かりし故にや、仕事には眞面目にて一旦定まれる務めに着手せば、そを天職として一心不亂に勵み他事を思はず、只管に大切なる主家の爲め、僅少の時をも惜しみて立ち働く、されば主人を始め一家の者よりいと愛でられてありける、而して折だに有らば己が德操を磨く良書を繙き、心身の修養に怠りなく、決して、他の女中或は附近の若き内儀さんや娘等と、卑しき女子の好みとか云へる井戸端會議や、埒なき浮世の無駄話には心を留めず、實に泥中の蓮の如し、されば其優れる心の光は顏にも表はれて、涼しく清き眼、赤く膨らみし頰の色、口邊にこぼるる不斷の微笑み、人をして自づから敬愛の情を起さしむ。

此の家婢此處に入りてより早七年、長き霜星の間恰も一日の如く、朝は未明に床を出で、廣き一家の內外の掃除より、料理一切に至る迄手早く之を爲し終り、病身勝ちなる主婦の身を氣遣ひ、優しく勞はりて、何一つとして主人夫妻の心身を勞せしめざる忠實者、而かも他の女中等と異りて、平素の操行は正しく、實に幾多僕婢の模範たり、斯の健氣なる家婢の身を、神は正しく御覽はし給ひ、軈がて幸多き運命は廻り來りて彼の女は益々向上せん。

因に人は皆世界てふ一大事務所の一事務員なれば、軍人も車夫も、左官も大工も大臣も、紙屑拾ひも髮結ひも、下駄靴修繕人も其他幾多の農工商人も、家婢も教員も、工女も官公吏も按摩も、皆是れ世界の一事務員たる事を大悟徹底して、以て各自其與へられたる職を天職として、不平なく働くこそ自身の平和乃至世の平和にこそあれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

初春の冷たき微風は靜かに書齋に吹き入りぬ、旦那は南緣の障子押し開きて庭の面に眼を遣れば、家婢は洗濯に餘念も無く、家僕も畑の野菜類に肥料を施しつつ、野良唄高う樂し氣に吟みつ、其聲の平和なる、都離れし里の新空氣に和して心地嬉し、旦那は朝の散策に家の周圍を一廻りして、再び書齋に入り机に憑れば、白梅の高き薫りは流れ入りて室内は清く生きぬ、旦那は本棚より「大寶冊」と題する書冊を靜かに取り下ろして謹誦しつゝあり、本書「大寶冊」は、明治天皇陛下の御生前に於ける尊き御言の葉を五百種以上謹解せしものにして、春花秋月の御襟懷いとめで度く御示し遊ばされし上に、九重の雲深き所より、山田守る翁、賤が伏家の童の上にも、深く大御心を寄せさせ給ひ、且つは敬神愛國の道より、修身齊家の訓に至る迄、備さに之を御諭し給へるもの、首々金玉、洵に吾等六千萬國民の遵奉し奉るべき無上の聖典にして、一度繙きし人は、獨り此旦那のみに限らず何人も繰り返し〳〵拜誦せざるを得ざる高き趣味の聖典なり。著者も一度び國祖報德會の發行になれる其謹解書を購讀せしが、陛下の國民を思ひ給へる大御心のほど、推し奉りて只管感涙に咽びぬ。

今此の圖に春未だ淺き三月の晨、此の好書を拜讀しつゝある旦那も、忝けなき陛下の御言の葉に感極まりて、思はずもハラ〳〵と熱つき涙に袖を潤ほしぬ。斯くて、此の主人は朝な夕なに閑暇さへ有らば、家族を集めて一家團欒の中に、この尊き趣味ある御製の一つ一つを說き語り大君の御思召しの忝けなさを深く諭しぬ、されば他の不健

全なる家庭の如き、活動寫眞よ芝居よ寄席よと浮かれて遊ぶ人々と異り、高風霽月、何時も此の家庭には澄みし正氣の漲りて、世人よりは模範として慕はれ尊重されつつあり。

凡そ人は各其趣味を異にするは世の常理ならんも、左りとて徒らに墮風墮藝の墮味を趣味などと濫稱して、餘りに國家社會を益せざる方面に迷染し、可惜耳目と時間とを費すよりも、此家の主人の如き崇高なる方面に趣味を有して樂しまば、自づから自家と國家社會を益すること多からん。

第二圖

藝者と醉客

第二章　藝者と醉客

おお、それよ、藝者てふ言の葉聞くさへも寒心身震ひする程なるに、況して其御當人は其日〳〵を如何にや暮し召さるるぞ、夜が遲ければ朝床出づる時間もいとど過ぎ越して、春の麗らの朝日影障子に眩ゆく時計は早十一時半、表通りに音繁き車の走り、子供の笑聲、森を出でたる小鳥の群れ、チチチチチチと囀づり乍ら意氣地無き身を窃と笑ふ、聲に眼覺めし色艶めきし一人の藝妓、アアーッと生欠伸を遠慮もなく、紊れし髪や綻びし寢卷きの跡も秩序なく、洗面取りて漸くに長き時間を費して身繕ひ終りて歸り、暫らく長煙管にてスバ〳〵と煙草を吹き居れば、早表戸の格子ガラリと打ち

開くる音は正しく待合の使人が迎ひにぞ來れる、早速待合に急ぎ參れば客人は待ち焦れ居る所、藝妓はホホと嬉しき笑顔を裝ふ内に、それとなく冷たき味の含まれたり、仲居は「入らつしやい」との婀娜かしき聲の端につれて、墮奢れの羽織に鍍金の鎖り、音チャラチャラと氣障に鳴らしつゝズッと通るは大家の殿御か、將た商家の墮落息子か、忽ち奥の八疊に並べられしは酒肴、色と猫撫聲とかを賣り物に、愛嬌笑ひやお世辭の草々も唯金の爲め、冷やかき心に卑しき願ひの深く籠るとは知らぬが佛の醉客殿、媚嫵な姿に意氣な帶、眼に付く金の入齒さへ只可愛らしと見ゆるのみ、三味や太鼓に數多の藝妓、旦那〳〵と下へも置かぬ待遇に忽ち積る盃の數は幾つも重りて、何時しか客の醉ひは廻りて精神朦朧げ、安けき眠も結句は身の仇家の仇國の仇、●●●●●●●●小時の後に醉客はハッと眼醒めて我に歸れば、勘定は數拾圓に上りしも未だ覺めやらぬ酒の香に、心はシドロモドロにて、財布の中よりバラリと黄金投げ遣り馴染藝妓に送られて、一歩は低く一歩は高く千鳥足して歸り行く、後に藝妓は二階の欄干に身を憑せつゝ醉客の後姿見送りて、「オホホホ妾等に金を費す馬鹿者よ」と赤き舌いと長く出して嘲笑と●●●●●●●●●●●●●●●●●●侮蔑の色を以て客人を愚視してぞ居たりける。

概して藝者等には眞實も無ければ熱つき情けもあらなくて、客取る商賣ゆゑ、笑顔愛嬌世辭言はお定りの誰彼と隔てもなく振り蒔き散らすが習ひとか聞けど、それもさることならん、そを金が欲しさの故ぞとも氣が付かぬ墮漢達は自分に眞情有りなどと早合點は些と自惚れな、嗚呼、憫れむべきかな酒色に耽る墮漢の徒や、只一時の愚快を

貪らんとてか斯る處へは足繁く踏み入るゝ、藝妓の心中推し見れば余りに馬鹿らしき事なるに、それよりも家に夫の歸りを待つ心美くしき妻の身に、將た子を思ふ兩親の心に深き思遣り有りて無意味に財を散らすの愚を演せずとも、其金にて敬神尊皇的の圖書なりと購ひ遣りて、春の日一人徒然に思ひを入るゝ妻に、優しき情けを注ぎ、又一つには父母の御心を安んぜしめ給ふならば、敢て藝者風情に愚視せらるゝ事も無かるべきに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ほんの束の間の快樂を貪らんとて何等意味なしに、天の與へし尊き時間と貴重なる國家の財とを醜猥なる方面に散らせし醉客は、醉ひの廻りに揚句の果ては、體はけ怠く頭痛は烈しく、熱つき額に手を當てて、春吹く風にトボトボと俯き加減に歸途に就く、圖は即ち醉客の眼を地上に落して歩む折柄、ハタと衝き當りしはそも何ぞ、公衆の心目を喜ばしめんとて植ゑつけられし花の王たる櫻木なり、當れば忽ちに美くしき花片ハラ〳〵と零れ散りて、芳ばしき香は眞白き花と共に地上に流れ去りたる光景。櫻花は不平も云はず、醉客の無禮にして公共心なく只一人の爲めに荒らされしを、言の葉には詰らざれども、其心中にては定めし醉人の愚と亂暴とを嘆き且つ怒りしならん。

金は浮世の廻りものとか人は云へど、其れも去る事乍ら、●●●●●●●●●●●●●●我が金とのみ思ふは狹き心に國家てふ觀念の無き人の淺き考にして、一切の財貨は悉く之れ大君のもの、國のも

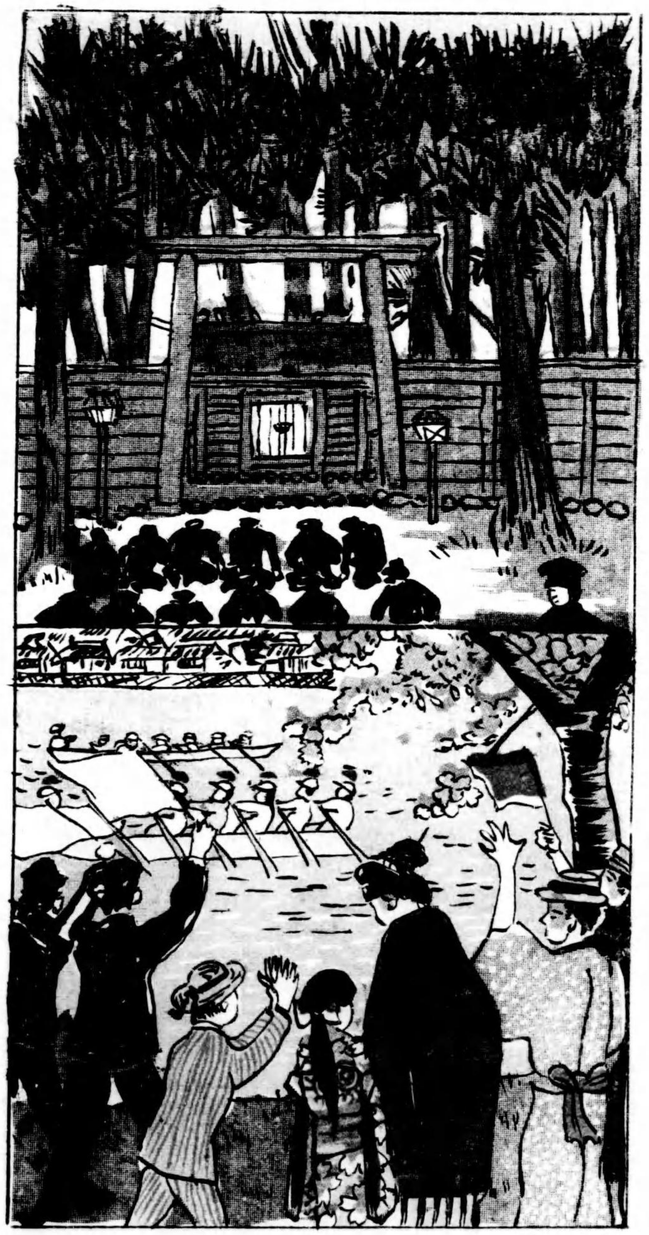
のたるや明かなり、各人は唯一時之を預り居るもの、然るにあはれ愚人の徒や、自己的趣味否私己的の下劣なる慾望を充たさんが爲め、此の尊き國貨を徒らに費すは實に不埒の極みなり。今熟々我國の借財を考ふれば、内外債實に廿億以上の多大に上るあり、噫此借財を誰が返濟するの任に當るものぞ、是れ皆國家の一員たる各自が此任に當るや當然の事なり。

殊に皇祖皇宗の御遺訓たる　明治天皇の御勅語の中にも、切に、「恭儉己ヲ持シ」とあり、又戊申の御詔書にも「勤儉産ヲ治メ」と御慈訓あるにあらずや、然るに、國家的の趣味或は敬神尊皇の爲めにとては裕に有てる財も散らさず、私己一身の卑しき愚樂を充たさんが爲めに財貨を空しう費すとは!!!

あはれ、斯かる愚劣の輩一人にても多ければ多き程、國家の衰微を來たす所以なる事敢て著者の言を俟たずして明かなり。而して藝者遊びなどは全く一時の愚快に過ぎず、醒むれば果敢なき泡沫の消えて跡なきのみ。

今此處に題せる醉客も、醉醒めて後、貴重なる國家の財を無意味に蒔き散らしたるに止まらで、公衆觀用の櫻花までも散らせしを悟らば、如何に後悔に堪えざるならん、慚愧に偲びざるならむ。世の之に類似せる人等よ、藝者と醉客と題して此處に掲げし理を知らば、以て今後を如何と爲す??

帽角



第三圖　女學生と

第三章　女學生と角帽

長閑けき春の日脚も何時しか西に春つきぬ。此處月島海岸の畔なる波の音さゝやかに聽ゆる處、小綺麗に立てる格子戸の内に、今しも勝手許にありて立ち働ける一人の女學生、年は梅の香りの芳ばしき未だ二九からぬ頃ほひ、束髪の額に振り懸る黑髪のほつれ毛そと搔き上げつゝ焜爐に起す料理の火、煽ぐ團扇に風薫り、赤く火照りし頰そと拂ふ。

御飯の炊き法お汁の煮法、和洋料理の數々を實地に習ひ試みつ、年拾ひたる母親には何一つ世話も燒かせず氣も揉ませず、敎は固く打ち守り、親の心を慰めて家事に只管

務むるこそ奥床しけれ、圖は心意氣正しき一女學生の今や學校より歸り來りて、夕餐の仕度を爲さんと襷掛けにて火を起しつゝある處、世間知らずの女學生上りの凡俗主婦を、現代一般の世評に曰く、遊藝とも名附くべき琴や三味線さては活動寫眞芝居見物などにのみ心醉ひて、最緊要なる家事、料理の草々、衣服の綻び、夜具布團の洗ひ張りより、掃除其他一切主婦として當然爲すべき仕事には不馴れ不熟練、之等が一家の破滅の原因となることもありと。

古より我が國は男女一心同體、女のみが一身の安逸を貪るは宜しからず、苟しくも主婦として爲すべき家事一切の事は自ら之を處理し、余り必要もなき只外見を衒はんが爲め或は自身の安樂を乞ひ願はんための女中などは置かぬが自家の爲め又國家の爲めなり、されど之もそれも學生時代よりの心懸け一つにて、圖の如き女學生が、昔堅氣の家に育ち女一通りの家事向仕事は克く之を習ひ實習し置く時は、假令他家に嫁し附くとも、何等の氣遲れも無し、今の女學生諸子は、ともすれば髪や身の飾り流行に心を奪はれ奢侈遊藝に耽り、必要なる家事的仕事に迂しとか聞く、されど常に健實なる思想のもとに、女子たるものゝ本分を自覺して、學生時代より寸暇を利用し家事に心を用ひ、實習せしならんには、自づから經濟にも通じ、家庭の平和も保ち得て、所謂良妻賢母となること疑ひ無きなり。

凡そ人は何歳になりても故郷ほど懷かしきものはあらじとよ。次なる女學生は第一期の試驗も人並み越しての良成績に喜び勇むにつけても、思ひは何時しか山河遠く數

十里を隔てし故山に馳せて歸心矢の如し。

いとも長き一夜を明かせば七月の二十一日、此の日より待ち侘びし暑中休暇は來れるなり、一時の別れを師や友に告げて汽車に乗りしも夢現、水の流れや走れる雲の一片を見るにつけても只故郷の偲ばれて、汽車の運びもいと遅き心地して急り立つ胸の叫び、驛〳〵と呼ぶ驛夫の聲に我れにもあらで飛び下りつ、見れば日頃夢見し可愛妹の人待ち顔のなつかしさよ、嬉しさに雀躍して田舎の凸凹道を共々に歩みつ、他の學生などと異り車や馬車に乗るの贅澤を爲さず、重き荷物も身心を鍛練する賜と却って喜びの色を増し、袴の裾もいと輕氣に勇み歩めば四里餘の道も何のその、忽ち彼方に見ゆる森林の中に見ゆる眞白き壁、立ち昇る紫の煙も坐ろ懐づかしし、兩親や兄弟の顔打ち見ては、先づ嬉しさに胸迫り、頓には言葉も出でず、御機嫌ようとの挨拶も只夢心地、夕餐の膳に一家揃ふて打ち向ひ、互に恙なきを祝ひ、異郷にて在りて學びし草々又は其他の風俗など愉快に語れば父母兄弟も殊の外機嫌宜ろしく、此の家はこの女學生の歸り來りてより一層ににぎやかになりにけり。

今日しも眞夏の空には一片の雲だに無く、キラ〳〵と照りつくる太陽の光りは鐵をも熔かす程に暑つきを、この女學生は教師以上に國産てふ事を念ふて、今や、廣き桑畑に立ちて桑摘みに他念も無し、眞白き手拭を姉さん冠りとし、足には黑の股引を穿き肩には襷を掛けたる姿も甲斐〳〵しく、一葉〳〵の細少かき桑を摘む手もとの早さ、顔は眞紅に火照り、全身よりにじみ出づる汗の雫も見るからに苦し氣なれど、顔には

愉快の色を湛へ、專心餘念もなし、されば大いなる籠も見る／＼桑の葉は積りて充分になりぬ、女學生は嫣然と笑み傾けつ籠を兩手に抱き家に歸れば母顔の滿足さ一通りならず「そんなに家の仕事ばかりせずと、學科の復習でもやらねば濟むまいものを」と氣遣へば、女學生はホホと優しく笑ひ乍ら「いいえ、學科の復習は夜一寸の時間で充分です、私にはお父さまやお母さまが汗と血を以て働いて得たお金をかけて下すつて、わざ／＼學校に迄出させて戴くのですもの、せめてタマサカ歸りました學期休みの時位精々お手傳ひせねば罰が當ります、況して國産の事を思へばをや、殊に畏くも今上皇后陛下を始め奉り各宮樣方に於かせられても、產業獎勵の御思召を以て御手づから養蠶の事に御努め遊ばさるると洩れ承ります」と答ふれば、母親は沁み／＼其言語を味ひつゝ、我が子ながら賴母しきものよと、只々喜悅溢るゝ許りなり。

實に此の女學生は他の女學生等と異りて、働く事を無上の趣味とし、寸暇なしに家の爲めにと働く、而かも學校に在りての成績は最も優良にして、常に模範生として稱へらる。

抑も教育なるものは人生實際界の役に立ちてこそ教育を受けたる甲斐もあるなれ、然らずば教育の意義は沒しなん、概して休みの時家に歸りて學科／＼と大騷ぎなどして父母の多忙を目前に見乍ら手傳ひもせぬやうな學生に限つて學科の成績は餘りに宜ろしきものにあらず、其癖自分の好き勝手な遊藝見物や化粧などに費す時間の無駄なる事は考へず、下らぬ文や手紙書く暇はありても働く暇の無いやうな學生が、なんぼう

學を修め術を習ひたりとて家のためにも社會の爲めにも將た國家の爲めにもならざるべし、寧ろ寸暇を利用して家の仕事一つも餘計に手傳ひ働きて父母の御心を喜ばしむるやうな學生こそ、かへつて其成績も又優秀なるものなり。

又如何に富豪の家に生れ、如何に高位高官の家に人となるも、女子として心掛くべき糸針の道に疎ければ女子と生れし意義を沒するなるべし、學有り才氣溢れ智多一と雖も裁縫の道心得ざれば女らしき感じせず、いと心憎く覺ゆるものなり、春は花秋は月と遊び狂ふてふ或女學生、又は新し臭き小說雜誌等に心醉して未だ肩揚も取るや取らずに、端した無くも戀を私語き、嚴肅なる父母や敎師の訓戒にも耳傾ぬとか聞く或小女等よ、實に圖に現はれし女學生の眞面目なる心懸けに同感あつて、徒らに虛榮を夢見ず榮譽を願はず眞に己の地位と財と境遇とを知りて、此の皇土に生を享け、皇祖のいや高き御稜威に潤ふ限り、よしなき思や徒事に心を傾けず、當然敬神の美風尊皇の精神を發揮せられなば、其は軈て御身等が一身上の幸福に止らず、社會を益し國家を發展せしむるの基たるなり。

夫れ現代の大和撫子の諸姉諸孃等よ、速やかに自覺して那魔意氣なる或る西洋婦人等の模範たりては如何？

尙ほ此處に附言したきは、既に讀者も知れる通り、近頃女子敎育の普及に從ひて各女學校の數もいよ〳〵增し、其競爭も刻一刻に激しくなり行きて、年頃の娘を持てる兩親が其數いと多き女學校を彼れや是れやと撰び定むるに心を痛め、又地方の女學生は

生徒募集の廣告や、稀に上京したる友の晴れやかなる言葉或は流行に染みし髪や化粧の高襟振り、又は新聞の記事などを見聞して心を唆られ、切りに華やかなる都の空に憧憬れ、我も〳〵と人眞似したり自身の虚榮を夢見て上京するものあり。

さり乍ら是等若き婦女子の徒らに憧憬を滿足せしめんが爲めの上京は、深き考慮を要することにして兩親も亦愛女の將來を思ひて深き注意と判斷とを要すべきなり。

一口に都とし言へば、名のみにても坐ろに麗はしう、將た賑はしう聽ゆれど、さて實際一度この生存競爭の激しき呪の手の繁き都會に來りて見れば、何れの目的と抱負とを抱きて上京したるを問はず誠に堪え難きものあり、種々の誘惑或は迫害、魔の手、處女の心を唆るが如き華美なる流行の惡風、輕佻なる思想の徒の間に起る墮風……數へ來れば實に枚擧に遑あらざる程諸々の障害ありて、迚も優しき弱き若き婦女子などの悠然として暮さるべき處にあらず、固より婦女子の教育が漸次盛んに赴き、社會も之を喜び婦人自身も教育の必要なるを自覺して、各勉强せんとする志はよみすべきもの勿論なれども、啻に都々と都に憧憬れて、輕々しく上京するは最も危險なる事にして、一面より之を考ふれば、深慮の結果に出ざるの上京は其婦女子自身の爲め、且つは父母兄弟姉妹に對し、又社會に對しても面白からざるの事情を釀すこと往々あり、嚴肅なる女學校の寄宿舍に入るにしても亦親戚の許に身を寄するにしても、其周圍には必ずや恐ろしき魔の手あり、誘惑の曇り潜みてあれば、此等の點につきて深き注意を忘るべからず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

霞と紛ひ雲と見む朝日に匂ふ櫻花、日頃の春雨に一層の榮添えて、美しき笑み傾けつゝ惜し氣も無く高き薫りを四邊に散らして、塵埃の濁りに染みし帝都の人の心を清らめんとてか咲き亂れたる。太陽の光も亦公平に都の地上を照らして嚴かに監視し給ふ、隅田川邊と聞くからに心晴々しく覺ゆるを况して上り下りの舟人が梶把る手並も面白や。見よや圖に描かれし角帽の群を!!!

春風徐ろに綠の葉末に薫る木陰に、敬神尊皇的の趣味高き書を繙き、一意專心餘念無きも時過ぎて、いざと許り、國家の所有たる各自の身體をいやが上にも鍊磨せんとて、神の御定め給ひしと聞く春季皇靈祭の安息日、朝より樂しきボートレース、身體練磨の體操か、揃ひも揃ひし白きシャツ一つに梶持ちて、エイヤ〱の懸け聲に走るよ走るよボートの群れ、彼方此方に數あまた、國家を念ふ眞心は謳ふ歌にも現はれて「君の爲め國の爲めには命もいらず、盡せや盡せ大丈夫よ」てふ壯歌の節も最勇ましう覺ゆるなり、獨逸語佛語英語等の學科は道具視して熱心に習へども、高く堅き思想は苟にも西洋の流れに染まぬ日本男子の潔き心には只念頭に國家あるのみ。

水も青澄む隅田川邊に舟漕ぎて、我も〱と負けじ魂の玉なす汗も何のものかは、波切り水押し梶躍らせて、露の雫が破られし水の泡と共に瑠璃色の寶玉と散る、そが間に在りて勝利の冠をとて、猛く雄々しき青年の血潮は躍り骨は鳴り意氣捲きて漕ぎ行く様のさても愉快さ面白さ、此處に勝利の月桂冠を獲たるは平素餘暇を以て實業の勞

働に汗血を吝まざる一快男子にぞありける。其壯快に喚めける群集は思はずも拍手に時を忘れ、堤の上に微笑める櫻も心有りけに枝を搖り。眞斯くなん男らしき遊に體を練り、惰弱なる戯れや優柔なる遊びに心散らさぬ正しく男らしき或角帽の群れ、是れや、やがて未來は國家を背に負ひて立つか、天晴大和の快男子。

* * * * * *

古は拔け參りと謂ひて、僕婢等の主人に隱れてコッソリと、世界の主神即ち我が皇祖の御靈を御祀りませる伊勢大廟に參詣せしものとかや、智進み世は開けたる今の時は、汽車あり船あり自轉車などもありて遠き人も近き地の人も、御伊勢樣迄參るに何の造作もあらうぞ。一日一錢の積み金も三年經てば大枚拾圓餘、此の位有れば餘程遠き地の人も、優に參詣して高き御稜威の靈廟を仰ぐを得べし、日の本の國に生れし光榮を有する民草は、一日半時たりとも忽にす可からざる敬神の美志ありて、皇祖の御恩德に謝し奉らずして如何で已むべき。角帽の群れ亦隊を整へて參詣し、切なる崇拜の赤誠を捧げて仰ぎまつれり。圖は今や、神宮の外玉垣御門の下に跪きて拜せるの光景なり。

實に古の歌人の詠めるが如く

何事のお在しますかは知らねども
忝けなさに涙こぼるる

の名歌に違はず、瑞雲天に靉き、淑氣林を罩め、脫塵仙境の地、長へに萬世不窮の色を滿たせる老杉古松、千代萬代の後猶ほ清き流れを變へざる五十鈴川上の神路山の靈景は、眞に此角帽團をして肅然襟を正し、懼然其御稜威を仰がしめ、他事には涙を出せし事のなき猛き青年男子の一同も思はず自然の涙は湧き溢れぬ。

因に三陛下の外は何人と雖も伊勢大廟の御正殿を目近く拜觀する事能はざるものにして、之が拜觀は圖書に據るの外無ければ、皇祖崇拜の念切なる人士は、近來都なる國祖報德會に御正殿圖の供給を仰ぎて自家の床の間が從來下素流の私己的趣味なりしを一變して、尊皇國家趣味の同圖を掲げて、眞に日本の床の間らしく崇高威觀たらしむる人多しと云ふ、慶すべきかな。

第四圖

看護婦と患者

第四章　看護婦と病客

萬花無情の嵐に吹き散らされしより、綠の色のみ日に增して、世は晩春に垂んとするの時、貧に迫れる賤が家に苦惱を訴ふる一病父あり、一昨年の秋の暮より、難治の病とか聽く肺炎に犯され、二星霜の長き間冷たき病床に呻吟し、一度は醫師も匙を投げし程の難病なりしを、謬らざる古人の言や、一に看病二に藥とやら、年未だ若き梅の蕾のいと固き二八に足らぬ早乙女の、赤き心の朝な夕なに寢もならで滿身の誠以て霜雪寒き冬の日も木嵐吹き荒ぶ晩秋の夕も、或は燒くが如き炎熱に人の心も熔け行く眞夏の晝も、怠り無き哀情至れる乙女の看護に、神も哀れみ給ひしか、胃腸肺病に最

も有効なる健康●●●碗てふ食器の發賣所を知らしむるに至り、此食器もて日夕飲食せしかば、有繋の重病も今年の初春遂に快癒するに至りぬ。されど尙不運の暗雲は此の孝心深き少女の身に纏ひて、うら若き身に苦悶激しき肺病を患ひ、遂に●病院に入院するの止むなきに至れり、圖は此少女が眞白き敷布の上に横はりて呻吟せるを、此病院に雇はれし某看護婦の極めて懇切に看護せる所にして、傍の人の見る眼にも此の病客と看護婦とは姉妹かと疑はるる程の親しき間柄なり、今此處に此の看護婦に就きて述べんか。

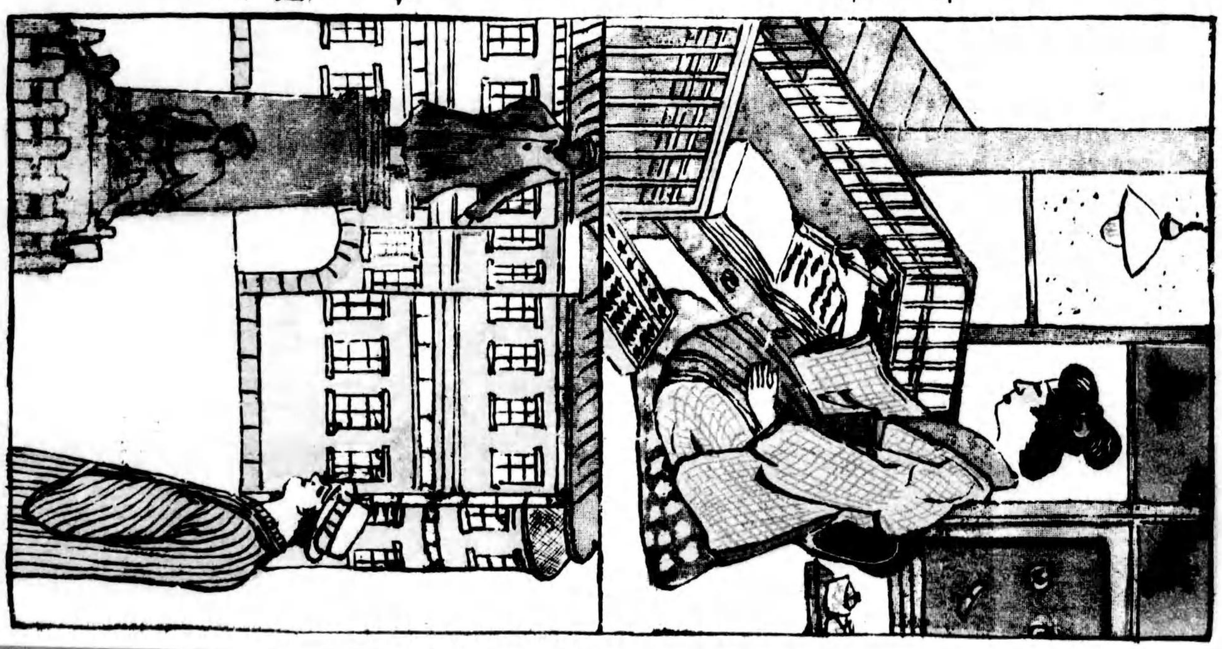
世の人の一般看護婦を評しては曰く、「現代の看護婦は一般に、否片端から墮落して居る、實に其の内容に至つては、哀れ憫然なる者だ、仔細に觀察して見給へ」と、誠に忌はしき此の言葉、謂ふ人の惡しきか評さるゝ看護婦の修養足らざるか、そは今殊更に著者の言を俟たずして、識者は容易に判斷を下し得るならん、又或人は曰はく、「何處の看護婦會に畜ひある看護婦を見ても聞いても、概して男客を喜び男客を愛し男客を親切に取扱ふ傾きあり」と、如何なる原因ありて斯くは男客をのみを尊ぶや？甚だ以て解し得ぬ事なり、今此處に描ける看護婦は、一般の夫れとは趣を異にして、男女何れの客に重きを置かず、苟にも病客とし見れば優しき心に恰も我が身の如く勞はりて、藥の服用法より食事、便通、洗濯等に至る迄一切、齒搔き處に手を届かせ、寸秒の油斷なしに親味も及ばぬ赤心もて看護するを、こよなき己が本分と自覺し、常に「多忙は幸福の母」●●●●●●てふ訓言を忘れず、怠りなく己が職分に忠實なるこそ美くしき心

掛けになん。昨月の夕つ方、心して活けし床の間の花瓶に咲ける白菖蒲、何時しか色失せ萎れ初むれば、直ちに己が作りし他の草花を活け換へ、風通し惡しと見れば即刻起つて窓障子押し開け、病客の眉一つ動かすのにも氣を配りて加減を尋ね、室の清潔乾濕法等も忽にせず、萬事萬端細心に意を用ひ、「情けは人の爲ならず」てふ眞理の諺に違はず、清き心に健氣なる意氣、されば病客の誰一人として此看護婦を敬慕せざるなく、稱へざるは無し。今や此の慈母の如き將た姉の如き、優しき御手に看護を受けつゝある小女は、何夢むらん小さき口許に微かに漂ふ笑み、瘦せし乍らも稍赤味を帶びし頰の色。老父も看護婦の温かき心に安心の眉を開きて哀心感謝の涙を注ぎぬ。

斯くの如き善良なる看護婦を雇ふてより、x病院の評判頓に高く、爲にx病院も大いに繁昌を極むと云ふ。又他の同僚や仲間の看護婦も、一度この模範的の看護婦に接すれば、心自づから引き締り、敬慕の念湧き、千歳の友となる。噫この看護婦の心事行動實に潔しとも尊むべしとも。

因に世の多くの看護婦は常に看護婦會に居るものにして、患家又は病院等より招かれて行くものなり。而して、其日當は看護婦の手腕により、一等二等三等などの高下ありて、看護婦會は其働きし看護婦の日當の幾割を得て、頗る利益多しと、蓋し看護婦會の經營者は未だ他の職業等の如く、競爭する程には同業者多からざる故にや、何れの看護婦會も生活に豐かにして、頗る利益多き事業なりと云ふ。

圖五夢



第五章　女將と番頭

此處は帝都にても人込み多き神田末廣町、そよ吹く東風に若柳の香りを受けて片道側に立てる一つの旅館、春陽館の名も陽氣、内より洩るゝ笑ひ聲、罪なき話も道行く人の心に留まり、「おお心地好ささうな宿屋だ、一つ泊つて見やう」と、入つて見れば誇大なる建築にてはあらねども、極めて瀟洒たる、塵一つ見えぬ掃除の行き屆き、風致の池に浮べる金魚、流れ落ちては眞白き泡沫を飛ばす瀧の白糸、音も清らかに小魚と私語き、周圍を取り捲く草々の、綠の葉色若々しく、一輪咲ける春菊の香りも坐ろ床しけれ。今し帳場に坐れる女將、涼しき双の眼に、溢るる愛嬌惜し氣も無く、客と

し見れば自から起つて之を迎へ、季節の挨拶より室の案内荷物の取り扱ひに至る迄、女中や番頭のみには任せ置かず、手づから活けし花瓶持ち運びて、塵埃に染みし客の心目を慰め、夏は扇に冬は温かき火をと、時候に依りて相應に、客の待遇にも心入れあり。禮は正しく言葉は明瞭にして而も優しく、身態りは更に流行を追はず、何れも揃ふて紡績絣、帶も安價な品よきメリンス、白き前掛け姿、女將自ら斯くの如ければ、番頭女中小僧に至るまで見樣見眞似て之に倣ひ、一家揃ふて只客をして快く寢食せしめ、旅の憂さを忘れしめんと心掛くるこそ殊勝なれ。されば此の女將が苦心と眞心にて成れる此の旅宿に投ぜし客は、沈める心も面白からぬ思ひも一時に忘れて只管快感を覺ゆ　剩つさへ此旅館の特徴とも云ふべきは、茶代一切廢止にして、それのみならず宿料の如きも、曾祖父の時代より安價繁榮の眞理を辨へ、米の倍價を標準とし、其れ以上に貪る勿れとの遺言もあれば、今も猶ほ、白米一升拾五錢の相場の時は一日の●●●●●●●●●●●●宿料三食附きにて參拾錢と云へるが如く、至極安價に勉强しつゝあれば、一犬吼へて萬犬に傳ふると同然、此旅館に泊りし人は、其安價勉强の旨を他人にも語り傳へるが故に、累年來客の增加に家は益々繁昌し、幸運漸次めぐり來る。圖は今や其日〳〵の客の數より、一切の勘定を女將が明細に帳簿に記入し居る處にして、燦たる電燈の光りは心磣れし現世に、極めて稀に見る此女將の殊勝なる行ひと、濁りなしに清く澄みたる双眼の美しさとを、いとど意味有り氣に照しつつあり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

客と主家とに忠實なる番頭は、今や此旅館の支配人となりて、客を取扱ふ職に從事しつゝあれど、由緒は正しき士の家に生れ、名も勇ましき軍人にて、彼の明治三十七八年の日露海戰にも參加して、功淺からざりし人なり。而して、彼の忠勇戰死の譽は高く、萬歳の後の世までも消え失せぬ勇士廣瀨中佐や、杉野兵曹長等とも、甞て寢食を共にせし間柄とか、此の番頭も亦曩に戰地に臨みし時、君國に捧げ奉れる生命なれば、戰死は固より覺悟の上、天晴れ大君に忠を盡し、平素の御恩德の萬分の一にても捧げ奉らんとて、勇み猛りて敵陣の中に割つて入り、憎くや敵兵を片ッ端より屠にせん、我が赤誠の達せざれば、再び生きて故山の土を踏まじ、如何なる面目あつて歸らるべきぞと、深き決心もて雨や霰より尙ほ激しく降りしきる彈丸の中を物ともせず突進して、我が大和魂を發揮し、勇み戰ふ其時に、無殘や敵彈の爲め左腕を打ち貫かれたれど、屈せず怯まず雄々しくも、遂に斥候の重任を完うし、以て大に功をあらはして、我が大和魂の恒勇を示し、日本軍人の範を垂れ、敵軍をしてあつと驚嘆の語を發せしめたる程の剛の者、忝けなくも　陛下よりは金鵄勳章をさへ賜はりしと。此の忠勇の譽高かりし軍人は、今旅館の番頭となりて、不自由なる身も厭はず、今日しも客を停車場まで見送りての歸り途、萬世橋橋畔に、今は早地下に、安らけく眠れる二勇士の生前に於ける潔よさを幾千歳の後までも記念せんとて高く建てられし銅像を眺め入り、昔懷かしき忠臣の面影よと、坐ろ懷舊の情抑へ難く、欽仰の念湧きて轉た感慨に堪へず、溢るゝ至情の涙は双の頰に流れて拭ふ由も無し。斯くて此の番頭は銅像

を伏し拜み、跡に心を殘して旅館に歸り去れり。

因に現代の青年中には、人生の最榮譽とすべき軍籍に身を入るるを厭ふが如き不埒の墮漢あり、徵兵檢査の際、合格を私かに恐るるが如き意氣地無しの卑怯者あり、此は實に怪しからぬ事にて、苟しくも日本男子と生れて、國家の干城たる軍人となるを嫌ふ如きは、全く此の尊き皇土の片隅にも置けぬ卑劣漢なり、斯る軟弱なる墮漢が此の皇土の中に稀にでもあるかと思へば、實に國家の爲め憂ふべき事にして、決して、之を此儘忽にすべきものにあらず、宜しく之が救世策を講ぜざるべからざるなり。近時憂國慨世の士が士氣皷吹の爲め多忙なる時間を割き、私費を拋つて各所に火を吐くが如き血の叫びを爲し、古武士の傳へし重き嚴めしき鎧まで着裝して演壇上に現はれ、大いに剛健なる氣風を奬勵しつゝある、其勞に對しては吾等大いに感謝の意を表せずして可なるべきぞや。

第六圖

僧侶と後家

第六章　僧侶と後家

春の彼岸は今や來れり。彼岸とは俗稱にして、實は我が　皇祖皇宗の靈を仰慕する一年二度の祭日にして、各宗教に於ても其形式こそ異れ、一同國民の皆進んで奉謝の意を表すべき日なり。宗教を以て世道人心を救はんとする僧侶は、本堂なる佛壇の御前に額づきて、聲も清けき讀經に我れを忘れて務め居るぞ眞面目なれ。

由來佛教は、印度の個人〳〵の人心は救ひたれども印度の國は亡びたり。此佛教を世●●●●●●●●●●●●●●●●界靈祖の鎮座まします日本の地に移して日本化し、日本の國を護らしめ發展せしむるに至りたるは、實に大和魂ある僧侶の力にして、近時亦耶蘇教界にも大和魂に富める

傳道師のあるありて、彼の猶太の國を亡ぼしたる耶蘇教を純然忠孝の日本化せしめんと努力する士あるの時に當り、書くも可厭き極みにあれど、今や人の心漸く奢侈に長じ浮薄に流れ、刻一刻に荒み行きて遊惰に耽るの時、最も神聖を佛「即神」の前に誓ひて世の人心を救ふべき僧侶の位置に在り乍ら、其等は稍もすれば讀經を借りて內心の自慾を逞しうするあり、苟にも、身に珠數を持ち、法の光に浴みして佛の道を說く者が、凡俗のそれと異る所なく、藝者遊びや女狂ひ、甚しきはユスリ騙りにも似たる不正不義の行ひ濟まして、內面の穢れを黑染めの衣に隱して世を欺き人を誤り、然も平然として恥ぢざるの徒あり、又人家の軒に立ちて珠數を双手に揉み乍ら、いと殊勝氣に經讀む僧も、眞に佛陀を解し、佛法に心を入れて全身より湧き迸しる眞の佛の道を讀めゝ聲にしあらば、如何許りいみじく尊きものならんに、只金品を得たさの賤しき心よりの行ひならば、其は全く物乞ひの類にも劣るなるべし。

斯くの如き僧侶は、如何に佛教を說き釋迦の教を衆人に傳ふるとも、將た又讀經に時を遣るとも、何等僧侶として價値無き事明かなり。今の世今の時一般の僧侶を識者は評して曰く、「世道人心を救はんには、先づ第一に腐敗せる幾多の僧侶を根本的に改革せずんば到底爲し難し」と、洵に理ある言葉なり。又曰く、「僧侶が表面を裝ふ美しき衣の裏面には、實に驚愕惜く能はざるの醜香あり、穢行あり」と、

嗚呼誤れる幾多の僧侶に反し、圖の如き眞に國を想ひ、社會を憂ひ、宗教に其身を犧牲となし、常に粗衣粗食に甘んじ、一心以て人心の腐敗せるを改良せんとて日夜寢食

をも忘れて法を説き、釋迦の教を世に廣め、又時には公衆を集めて自から敬神尊皇の説教を爲し、天晴佛の使として毫も恥ぢざる否一般僧侶の鑑ともすべき此僧侶、朝な夕なに身を清め、只管讀經に餘念も無し。されば此村の數多の人々は、此僧侶を恰も神の如くに敬慕し、何事が起りても直ちに此僧侶の寺に行き、萬事を相談し萬事を依賴すと、又此僧が説く佛の道を此上なき教訓とし、皆自からを戒しめて其職に働くと云ふ。實に是の如き崇高なる人格を有せる名僧の多ければ多き程國家社會のため喜ぶべき事にして多くの凡俗なる僧侶の以て鑑とすべきことにこそ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

貞婦は二夫に見えずてふ古諺に違はざる此の婦人は、良人逝いて玆に十有三年、能く夫の後を受けて家を治め、財を整へ、姑なる老母を養ひ、夫の記念の二人の子女を教育し、其が費用は自ら働きて之れを得、如何なる困苦にも打ち勝ちて、誘惑に堪へ、一糸亂れず婦人の生命とも云ひつべき操を固く打ち守り、家名を汚さず。今や春の彼岸の季節に當り、二人の子供を引き連れ、眞白き花に己が思を込め、双の頬に溢れ落つる熱つき涙を手向け、今は早他界の人と逝きませし夫の御魂慰めんものと、親子三人墓標の前に跪き參拜せる其姿、墓前に捧げし榊と樒は春の光りに一層の青さを増して、常世に色は變らねど移り變るは人生の習ひ、一昔以前は彼岸の中日を期して優しき夫と共に、時々此墓地に祖父母の靈を慰めまつり、心に何の苦も無くて常世の春を吟みつつ、赤き心に末遂を、固く誓ひて君の爲め國の爲め家の爲め盡瘁して共に世人

の模範となり、人生の眞の意義を悟りて潔よく一生を終らんなどと、語りし事もありしに、今は早、遠き昔の思ひ出に過ぎで淋しき一人身の、せめては忘記念に殘されしこの二人の子を、人一倍の教育爲し以て國家有爲の人として世に出すが夫への眞心、又之が唯一の慰安と、低れし頭を上げて振り顧れば、子等は小さき手を合せ、母の後に額づきていと大人しき風情に、可憐の情のいや増して坐ろに袖を絞りけり。今や捧げまつりし線香は縷々として、灰色の墓石を取り捲き、若き寡人のしほらしき胸中と、父親慕ふ幼き子等が切なき心とを哀れむが如く將た慈しむが如く細く立ち上りぬ。今や世の人の心は次第にすさみ行き、殊に婦女子が最も重んずべき貞操を無視し、稍もすれば淫風に染まんとする未亡人、乃至一般の婦女子連、此の寡人の前に顏色あ

りや？

永劫に盡きぬ名殘の花の香を、
墓標の前に捧げまつらむ。
白き花手向る人の心には、
只美くしき愛ぞ籠れる。

あな床し、操守れる眞心は、
顔に溢れていとゞ尊し。

第七圖

女教師と男教師

第七章　女教師と男教師

五月雨の晴れたる空の長閑さよ。

八重の櫻も花に代れる綠の色の日に增して、柳の糸はそよ吹く風に搖られ、校を繞れる檻柵の傍近く流るゝ小川の水音は、花菖蒲の今や綻びんとする蕾の香りに何を私語き歌ふらん。校庭には教師と共に生徒等の培ひたりし八千草が色美くしく咲き亂れたり。

みすずかる信濃の國は南佐のほとり、音に鳴る淺間山、不斷の勵ましさを紫雲に紛ふ煙にて自然の教訓を垂るゝ尊さと、水に名を得し千曲川の曲折波瀾に富める流れとを、

眼にも耳にも共にしつ、東信の一角に高く聳ゆる此校は、今し休みの時間とぞ見受らる、春の日和の麗かさを浴びて、子供等はテニスやベースボール、遊動圓木ブランコや、鬼ごつこ玉投げなどと、種々の活潑なる遊戯に餘念なき折柄、忽ち響く鈴の音に今の遊びは何處へやら、ものの二分も經たぬうち、早や集體場は整列に而も靜肅になりぬ。軈てそれ〳〵の教室に入りし後に尋常の二三學年とも覺しき組の男女二團の群れ、女生團は頰の肉豐かなる一女教師に連れられ、他の男生徒の群れは剛健なる銅色の男教師に從ひて何れも校庭に出で來りぬ。女教師と男教師とは各自庭前の一部を陣取りて、兒童等に體操を教へ始めぬ。兒童の勇ましき練習の聲、教師が熱誠籠れる教へ振り、見るからにそゞろ心地宜し。女教師は高尙なる木綿の柄の筒袖に、濃き紫黑色の木綿袴胸高くキリリッと穿き、髮は造作なき束髮に結び、一見引き締りし口元には、げに人を造らんとする高き思想を有せるが如し。檻柵の外よりは覗き見する若き農夫や、手拭被むれる山男又は桑摘む乙女子等の、何かヒソ〳〵私語き乍ら眺め居るにも、露程の心を留めず、只管兒童の爲めにと、眼の色一つ動かさで、晩春の赤き太陽に照らされつつ、頰のほてりや汗の流れにも緩む心は更に無く、教へに努む其樣は唯尊くぞ見ゆ。凡そ十分間程體操を教へ居りしが次はオルガン出し、敬神尊皇的の歌と、此校の唱歌とを、教師が人知れず苦心して成し上げし自作の遊戯、幼き子等に練習させ、兩手巧みに奏ずるオルガンの、調子好く遊戯と合致して、子等が動作の巧妙さ、葉櫻搖り動かす微風も一際の趣味添へて、今を眞盛りと咲き垂れたる紫の藤の花

さへ笑み傾けて、恰かも稱へたるが如くに此校獨特の花の香を益々發揮して遊戯に見惚れて居たりける。一方男教師の率ゆる一團は廿分間の體操に何れも額に玉なす汗、されども教師の壯快なる態度と熱心とに傚ひ、誰一人倦怠を覺ゆる人も無く、生き〳〵したる其擧動、發聲、道行く男女自づから立ち止まりて眺めてぞ行く。體操終れば次はベースボール、飛び行く足の素早くして、ホール受け止む手並は勝れ、パッチリ玉受く其音高く四邊に鳴つて面白し。やがて之等の兒童も校の運動を代表する未來の選手かと微笑む教師、賞め行く觀衆。

時の流れのいと早うして、早三十分を告ぐる振鈴に、女教師も男教師も、夫れ〳〵兒童を引つれて校内に入りぬ。

次は何れも修身の授業、男女教師は各々別室に己が受持てる兒童を連れて、さて教授に心入れぬ。忠孝てふ題下に先づ、皇祖及び天皇陛下の尊くして忝けなさを說き教へ、それより日本國民としての覺悟より始めて、遠きは彼の楠公父子の忠烈の例より、近くは廣瀨中佐や乃木大將などの鬼神をも泣かしむる忠義の物語り、扨ては實業努力のことどもを、全身の赤心罩めて、事實を目前に活躍せしめたる說話の熱烈さ、殊に忠勇の士が忠義の刄に斃れし時の有樣を語る時は、恰も泣けるが如く將た訴ふるが如く、勇ましき戰の時の事どもは、或は猛り或は怒り、恰も教師自身が其等の人々の如き態度もて語り聞かしむる其熱誠には、兎角倦き易くして而かも騷ぎ易き之等幼き兒童等も、唯々深く感じ入り、誰あつて欠伸一つする者さへ無く、何れも圓らなる眼大きく

見張りて、之等忠勇の士の最後を惜しまざるなく又、其潔さに、異口同音「偉いなあ」との感嘆の聲を發せざるは無かりき。げに平素低能兒よと目ざさるる或子供さへ、この忠義厚き人々の物語りを聞きて、いたく感じ「やがて我等も斯くあらなん、忠義の爲めには吾等とて、など、正成公や廣瀬中佐に劣らんや」と云へるが如き面地して、思はずも肩を怒らし、唇を嚙みしめて居たりける。斯くして三十分間の修身教授は終へたれど、兒童が教室を出る時には、何れの子等が胸の中にも頭の内にも、唯忠孝の二字深く刻めるのみ。噫、誠實の充たされたる此の教師等の教授は、如何許り深き感動を兒童に與へしならん。

若き俗の男女ならば、衣服や髮の飾り、靴や帽子などと兩親に、ねだるが常なるを、此の教師は更に浮きたる心とては無く、埒も無き戲れ言や、無駄話には耳も傾けず、唯己が職分を全うせんとて斯くはよくつとむる。女教師は朝とく起きて朝餐の仕度より掃除に至る迄、一切自身に爲して人の手を煩はさず、準備整ふれば家を出で、朝の草露踏み分けつ、袴の裳裾もいと輕く、一里餘りの凸凹道も快よく步みて目指す校へと、校に在つては教授の時間は云ふもさらなり、休みの時間もむげには費さず、寸暇もあらば尊き國體的の圖書、教授の參考書、或は女大學、修養訓などと良書を繙き、又男教師も同じく詰らぬ遊びに時をやらず、授業のかたはら、時には擊劍柔道などにも趣味有ちて生徒とも共々戰ひつ、體を鍛ふると同時に大いに士氣をも振興し、以て與へられたる使命のもとに、己が天職に忠實ならんとて孜々として働く。

尙ほ玆に特筆すべきは此校の教師等は國家經濟と公德心とを念頭に置くものなれば、「學校と家庭との聯絡」てふ口實を以て、濫りに生徒の父兄等の多忙なる時間を煩はすが如き不德義を演ぜず、又贈呈品の受賄等は眼中に無くして何事も模範的の人物たるの實を示しつつあり、又此校の職員連は若しや健康を失して欠勤する樣の事ありては職分に對して相濟まぬとの至誠より、揃ひも揃ふて、彼の恐るべき肺結核其他胃腸病の防禦用たる健康碗を求めて、日常使用しつゝあるが故に、毎日白墨と塵埃の分子は吸へども、未だ嘗つて肺結核や其他肋膜などの類黴だも患ひし事なく、人皆其心掛けの行き屆けるを嘆賞し、他校の職員連も亦其健康體に一驚を喫する程なり。實に世の女教師も男教師も圖の如き人たらんには、即ち此の教師等の如く心理狀態を保持せしならんには、男女職員間に往々持ち上がる忌はしき風評も起らず、又教育界の墮落腐敗てふ言も湧かざるべきに、將た「自身治まらぬ教員位が」とか、或は「教員の內幕は見られぬ」などとの切なき世評も聞かざるべきに、あゝ如何せん現今の一般教育界を!!!

「木石にあらざる限りは云々」等と、自制もなきを公然語に表現して、而も恬として恥ぢざる墮教員もあり、又バンを得たさに型の如く學校に行き、型の如く教鞭を取りて歸る名のみの教師もあり、寔に憂ふべきかな現今小學教師の多數や、酒は飲めども眞理は呑めず、人を造るてふ重任を負へる身が、斯る自覺なき現今の狀態にては如何で職責を完ふしべきぞ。斯る幼稚なる思想の教員ありては、世界一等國と誇る本邦教

育家の價値はなけん。

凡そ小學校教員なるものは、或種の發行業者等の如く、天下の青年壯老者を間接に教化指導する程の廣き範圍の重大天職は有せざらんも、將來の國民を造る兒童教育の重任に當るものなれば一通りや二通りや三通りや五通りの心掛けにては、到底任務を完うする能ふまじ、げに一大抱負と責任心とを以て兒童教育に盡瘁するならば、軈て世界的模範教育者となるや期すべきなり。

聞く、今より數年前、九州の士風に富める或校の教師等が、純軍隊式に模擬せる練武を行ひしに、毫も國家を念頭に置かざる唯洋紙を活字に染めて賣高の多からん事を期せるが如き某新聞紙は、大いに詭辯を弄して其練武の擧を攻撃して識者の眉を顰めしことありと。苟くも國家社會の爲めを圖るべき重大天職を帶べる新聞紙なるものが、徒らに白紙を埋めんが爲めに、輕卒に人を攻撃する事の可否は六千萬同胞の識斷に任せて、吾人茲に多くを言ふの必要もなけん。左は左りながら近時東京帝國大學と陸軍側との交渉纏まりて、學生に小銃射擊の練習を爲さしむる快擧の現はれたるは、皇國の爲め頗る吾人の意を強ふするに足るものあり。尚ほ一層小中學校等に於ても純軍隊式の練武的壯擧の旺ならんことを吾等は衷心希望せざるを得ざるものなり。

第八圖

海員ノ妻ト呉服賣男

第八章　海員の妻と吳服賣男

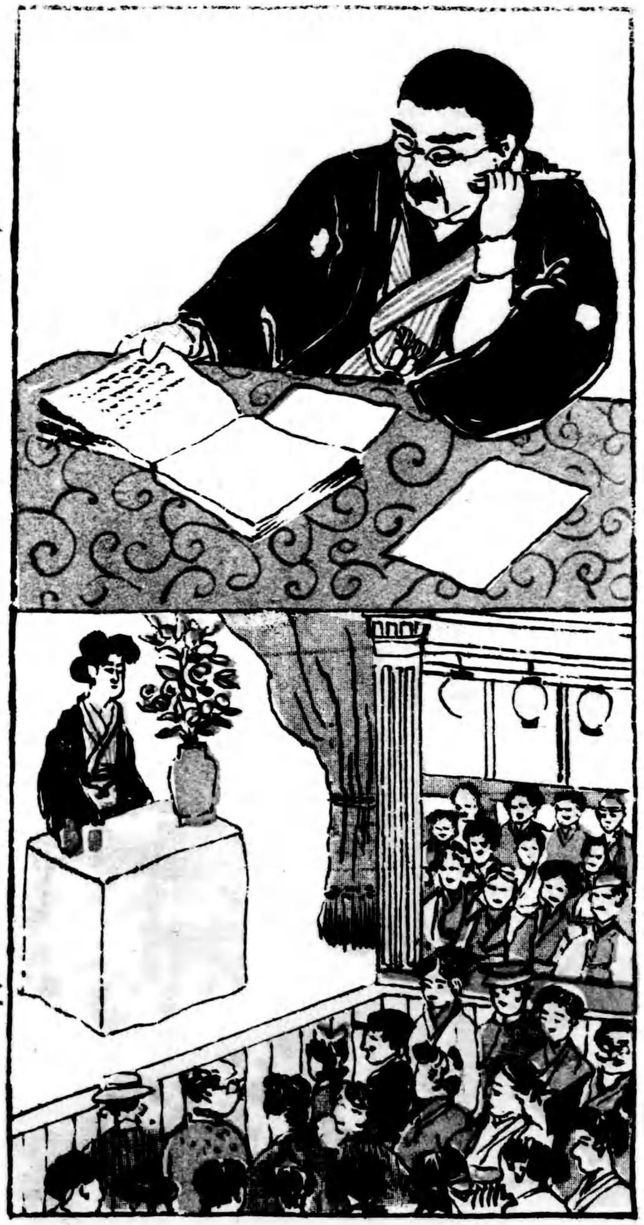
遠く見渡せば青く澄みて限りも知れぬ海原は鏡よりも猶ほ平かなり、海面輕く撫づる春風に、起れる大少幾萬の銀波金波は調定まらぬ音律を立てゝ、綠り色濃き松並木の砂濱に、寄せては復返へす風光見惚るる程に美くし。おお波や懷かし水や床し、我が慕はしき夫の君も、海原遠き彼方の御空に働きて苦勞遊ばされて暮しますらん。夫の留守一切引き受けて一家守るは妻たるものゝ役目、いざ仕事に懸り寸秒も惜しみて働くこそ夫への忠節、國家社會に盡す實と、清らかなる春の日を障子越しに浴びて、東京神田なる日本化學研究所より習ひ得たる、麥ミルクの製造販賣に取りかゝらんと

する折しも、訪ふ人聲に首傾けて見れば、敬神尊皇的の圖書販賣員にはあらで一人の呉服賣男、あゝ又來られしかと心には煩はしく思へども、さあらぬ體に取り繕ろひ、「御用事」はと、言葉優しく問へば、「へイ今日は、奥樣、今日は奥樣の必らず御氣に召す品をどつさり取り揃へて持つて參りました。へイ」と薄氣味惡き笑ひ顔、憎しとにはあらねども餘り心地面白からぬ商人、殊には夫の留守を知り乍ら何かと用事かこつけて、時々來るは怪しからんことと、多少は心に怒れども其處は社會を心得居つて、彼が取り出す呉服を見れば、此は抑も國家の經濟も辨へず!! 社會の風紀も想はざる奢侈や遊惰に耽る劣等思想の徒輩が身を包む絹や縮緬お召しなどにて、それとなしに厭氣を催さしむる華奢極まりし品々、商人はさも誇らし氣に、「是が西陣それが京染め、之は只今最も流行の新柄お召、お花見の晴れ着には持つて來いでございます。奥樣には何しも配合が宜しうございます。へイ、結構でございます。が、殊にこちらのお召のお給に、綾織り博多の御帶、實に素晴らしくお似合なさいます、やがて旦那樣もお歸りになるさうですから、お迎ひの時にこの着物をおめし遊ばしていらつしやい、さぞ旦那樣も御滿足でせう、さあお氣に召したのを」と、お世辭たら〳〵に押し進むれば普通の婦人ならば其煽動に乘るべきに、平素思想界を憂嘆せる健氣なる此家婦は、柳眉を寄せて、「斯んな贅澤な反物を私共が如何して用ひられませう。私共の家庭は普通の皆樣の家庭とは趣を異にしてゐます。此の樣な贅澤品を買ふお金がありますれば、敬神尊皇的の伊勢神宮御正殿圖でも、三種の御神器圖でも買ひます。夫も私も此家庭

を單に夫婦のみの家庭とは思ひませぬ。●●●●●國家の家庭と心得て居ります。財は決して私共一己の財でなく、●●●●國家の財と存じます。昔より奢る平家は久しからずと云ひますが、實に奢侈ほど身を滅ぼし、家を衰へさせ、國家を害するものはありませぬ。失禮ながら此の樣な奢侈品は決して買ひませんから速にお持ち歸りになつて下さい」と、言葉もいとど嚴格に一言亂れぬ神の如き挨拶に、有繋の世辭馴れし吳服賣男も、理の當然に一も二もなく、頭を垂れて茫然たり。圖は、今海員の妻が奢侈品を持ち來れる吳服賣男を、キッパリと拒絶して居るのところ。

熟々慮ふるに、今や奢侈は其絶頂に上り、一般の弊風高價なる流行のみを追ひ、絹物を尙び綿布を卑しむが如き惡風至らざるなし、ああ、各戸の前途國家の前途實に深憂の極みならずや!!!　古より身嗜みと云ひて、身分相應に繕ふは固より必要の事なれど之とて手織木綿にメリンスの帶位にて、只垢附かぬ瀟洒たる身態りこそ床しく將た美しく見ゆるものなり。徒らに、高價にして然も弱き絹物など身に纏ふとも、又如何に紅白粉の化粧などにのみ心を凝らすとも、內心卑しければかへつて醜く見ゆるものなり。假令木綿物にて化粧などせずとも、內心淸ければ自然と眼に一種の輝あり。頰に美くしき紅あり、口邊に云ひ知れぬ微笑の漂ひて何となく、優雅に高尙に見ゆるものなり。聞く、帝都に於ても眞に思想界を憂へる上流の最嚴格なる家庭に在りては、常用としては主婦を始め僕婢に至る迄、木綿織の紡績位にて、藝妓娼妓や或銀行會社の事夢員等の如き醜なる奢侈競爭の贅澤は許さずと。見よ末代までも忠臣賢婦と稱さる

る乃木大將夫妻の高く尊き其平素を!!!逝きませし大將夫妻の生前に於ける美擧永遠の鑑は今改めて、此處に述べずとも明晰なり。あはれ虛榮の夢に迷へる奢侈の徒や遊惰の輩、覺めよ〳〵速かに、覺めて健實なる國民たれ、海員の妻のそれの如くに!!!



文士

女優

第九章　文士と女優

徒らに士氣の死滅せる軟俗者流の歡心を買はんが爲め、乃至は自己の名聲を博さんとの醜慾心より、恋に墮藝を軟文に著はし、以て滔々たる軟墮の世を益々軟墮ならしむる文死の徒ある時に當り、蹶然起つて武士道を文筆に說き著はし、士氣を鼓吹して國家社會を益せんとするの士魂を有するの文章家を目して吾人は文死と稱する能はず、之を文士と謂はずして何をか文士と謂ふ。

圖は文士が春陽の候、俗人ならば紅白世を飾れる麗はしき花の香に憧憬れ、或は朧ろに霞む夜の月にと狂ひ浮かるるの折、燃ゆるが如き青春の血潮傾けて、大いに敬神尊

皇愛國の道を筆に説き、或は往時狹量なる幕吏の忌彈に觸れて、遂に捕はれの身となり、獄中に呻吟したりし寛文年間の烈士山鹿素行先生の青春時代と吉田松蔭先生の青春時代等を譯しつゝあるところ。

因に素行先生は世人の普く知れる如く、寛文六年に時の政府や凡人の好まざる言動を敢てし、遂に入獄の犧牲となりし志士なるが、人造の法律語を以て之を稱せば俗人は之を一口に前科者とは謂ふなり。而も素行先生の罪や、士氣强毅を鼓吹せしに由る寃罪なりき、世には頗る大小の寃罪も多かるらし、彼の吉田松蔭先生の如き、大西鄕南洲翁の如き其他無名有實の志士等多くは皆是れ幾度か牢獄の裡に尊皇愛國を胸に吟せしか、推し迦れば轉た感慨に堪へざるもの、計り知れざらん。明治の楠公よと稱へらるる乃木將軍は、大いに素行先生を欣仰し心界の師とし居たりしが、或時宮中に參內し、明治天皇に拜謁を給はり以て素行先生に御贈位のあり給はらん事を奉願せしに、仁慈洪德に御在せし　明治大帝は素行先生に正四位を追贈し給はりしと。今は早、地下に永眠せらるゝ素行先生亦大御心の忝けなさに感涙に咽ぶならん。

＊　＊　＊　＊

凡そ女優の性質には四種あるらめり。一は榮譽を希うて一身の慾望を貧らんとの卑しき虛榮心より女優てふ職に就くあり。

一は浮き節繁き現世の激しき!! 文明の潮流に抗する恒勇とてはなく、徒らに軟文藝に迷染し奢侈に陷り、緩みし心、弱き身の、慾じい學問が反つて身の仇、神の御咎めを被

りて、ドンと落ちしは奈落の底てふ底ひも知れぬ深濁り、世に云ふ墮落の極の末、親には背き、友には捨てられ、思案の果てが不圖思ひ付きし藝に身を賣り、女優の二字に浮き身を窶し、紅白粉に作りし眉、聲色一つも餘計に使ひ、眼にも口にも色婀娜めきたる愛嬌こぼし、放蕩旦那や生優しき客を己が味方に引き入れて、埒なき遊びに有耶無耶と、貴重な月日を無氣に過ごすもあり、斯る女優は、人生なるものゝ意義も解せねば、況して、皇祖の御稜威も辨へず、本邦人の世界に誇る尊皇愛國の美精心などは藥にしたくもあらずてふ憫然たるものなり。

一は此等と全く相反して、忠孝の二字を念頭に、正直律義なる老いたる兩親の貧を眼前に見ては、氣も坐ろ、身の榮達は何のその、此の身は假令粉となるも、兩親を助け弟妹を養ふ事の能ふならば本望と、清くも亦可憐なる心より女優になれるものもあり。餘り心には染まぬ事ながら、身一度女優の仲間入りしてより、朝夕に打ち磨く心の玉と藝の巧みさは、自然からなる芳ばしき顏に現はれて何となく氣高く見ゆ。斯かる境遇より、斯かる心より詮方なしに女優となりしは、世人もさしたる厭氣は催さず、否却つて同情の念湧くものなり。

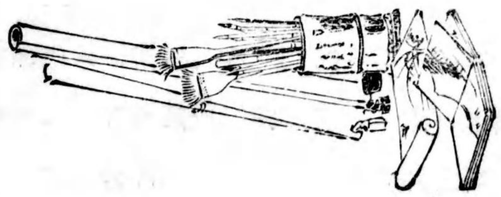
一は濁れる人心の改良、風俗矯正てふ重き使命を帶びて蹶起して以て女優になるあり。圖は賢良なる一女優が一定の劇を濟まして後、疲勞し切つたる體をも厭ひなく、春雨蕭々として軒端を叩く黄昏時、幾多の觀衆の前に立ちて、己が赤心を忌憚なく吐露し以て思想改良を促し居るの光景なり。此の女優一度斯かる苦界に浮き身を窶すや、常

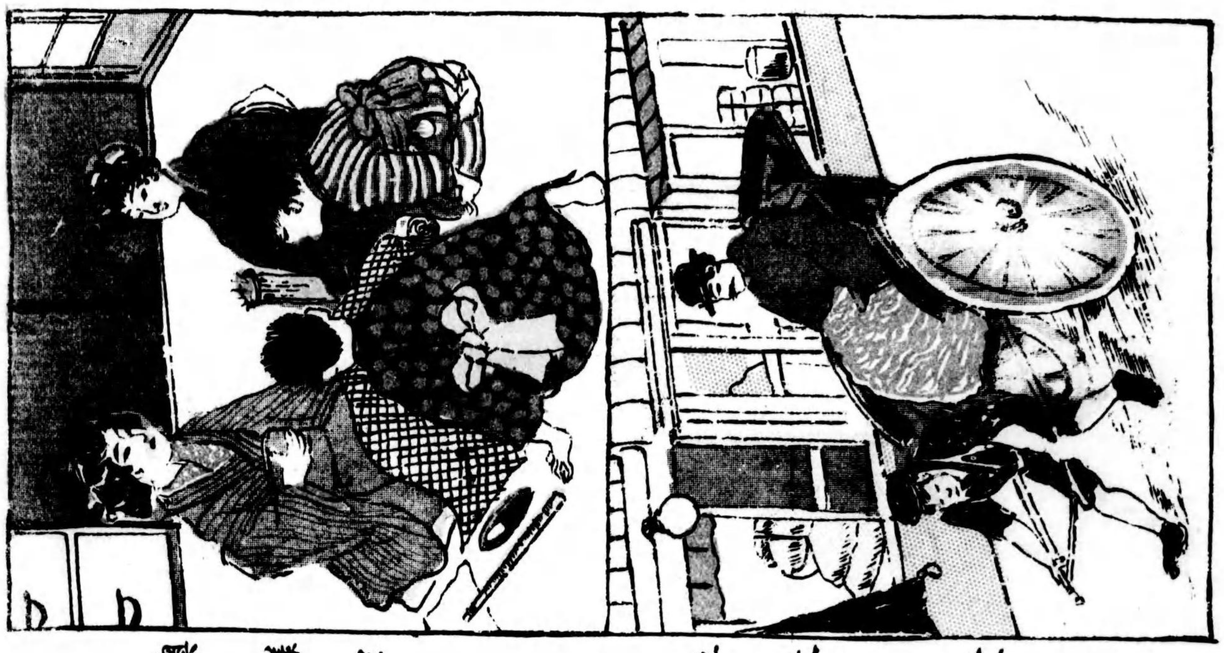
に鞏固なる意志と、全身の勇と忍耐とを以て、俳優間の風紀紊亂せるを嘆き、墮落を慨し、之が改良に日夜肺肝を碎き考慮と實行とに時を忘る。

斯くして此女優は同僚俳優の墮落を自然に救ひ、觀客に呈する劇も主として破邪顯正を旨とし、惡を懲らし善を勸むるを、材料とし、苟にも人心をして遊惰に流れしめ、墮落せしむるが如き墮藝を演ぜしめざる樣、主催者を始め數多の俳優を說き、奔走すること熱烈にして其至誠は天に通じ、此の女優の一團は何れも崇高なる人格と健實なる思想とを有するに至れり。而して此女優は常に、　皇祖崇拜の美風を說き其養成に努め、敬神尊皇の思想皷吹に盡瘁し、以て國家社會に貢獻することを己が本分と心得居れり、實に一般女優俳優の模範ともすべき此女優、其精神の健實なると、素行の正しき、斯かる女優のありてこそ本邦の遊藝術が世界に秀でたる國家的のものとなりて、其面目を一新するに至るべきなり。あはれこの文士此の女優、洵に現代の一般遊藝界の好手本とも謂ふべきかな。

因に藝術とは農藝、工藝、水產藝、手藝等の如き產業方面の事を主として藝術と稱するを至當とすれども、著者は軟文思想に魅られ居る者等の讀解に便せんが爲め、

茲には遊藝をまで藝術とは曲筆誤稱せり、乞ふ叱り給ふなよ硬骨思想の志士。怒り給ふなよ健文士の諸豪!!!





五ガ　夫　郎　　と　葬　集

第十章　奥様と車夫

大家の奥様などとし云へば概ねは、下女や下男に或は家扶や小間使などに取りまかれ、奥様〳〵とチヤホヤ崇めまつられて、家事向き一切の切り盛は、ちと出來難しとか聽けど、そは餘りに見聞狹き人のいひ草になん。今此處に記す奥様は、身分も地位も普通よりは少しは高く、且つ財も多き大家の主婦なれど、一家の内事は言ふもさらなり、下々の家扶や小間使下女下男に至るまでの一切の世話を爲し、子女の教育より、裁縫料理に至るまで下々の者のみには任せ置かず、以て家を整へ夫をして家を顧るの憂なからしむてふ、一般奥様なるものの龜鑑とも謂ふべきものなり。

今や春の光薄れて夕告げ鳥の啼き音淋しく、明るき現世は何時しか夜の幕の下ろされて、早アークライトの光り街路に眩きの頃、夕餐すませし此の家の奥様、今し主人の衣服を縫はんとて針の運びに精出し、心入るるの傍に、三人の子供を前に置き學科の復習に努めさせ、且つ自身にて導き教へ居れり。都とは云へど此處は市を稍東方にあたる麻布の區内、電車通りを七八町も離れたる所にして、家を繞れる森林のみいと繁し。比較的山里近き處なれば夜の靜けさ、唯裏の小池に落つる寛の響き、庭園の常緑木の葉をかすめ吹く小夜嵐、遠く聞ゆる犬の聲。

奥様は、三人の子供の正しく坐して輝く電燈の光に餘念無く學びの道を辿りつゝある風情を見て、すゞろに轉だ快念を禁じ得ず、九時を告ぐる時計の音を耳にしつ針の手休めて、神棚に供へありし煎餅取り下ろし「神(天照皇大神)にお上げ申した尊いお菓子、精出して勉強した御褒美に上げませう」と、等分に分け與へつ、長女を顧みて笑み傾けつゝ、「お前は勉強してどういふものにおなりか」と、問へばしほらしや十一の少女、小さき口を靜かに開きて、「母様、私は母さまのやうな働く偉い奥様になつて女の道を盡します」と、聲も明瞭に答ふれば、主婦はにつこり微笑みながら頭の下げ髪を撫で下しつゝ、「あゝさうですか、好いお考へだわネー何卒母さんよりモット偉い人になつて、モット〳〵大勢の人のお手本となつて下さい」と優しく教へれば、長女は「ハイ」と大人しき聲もて答へぬ。「數男さんは?」と問はれて、まだ漸く九歳になりし許りの腕白さ盛りの年なれど、さすが躾は爭はれぬもの、行儀正しく母の顔を打ち守

りて、「僕は乃木大將や伊東元帥や東郷大將の樣なウント偉い軍人になつて、天皇陛下に忠義を盡します」「おゝ偉い〳〵、數男さんは強いから屹度大將になれませう、よく忠義と云ふ事を何將も忘れませんネー、よいお心掛けです」と、賞められて子供心に嬉しさと誇らしさに肩張つて、「どうだ吉男」と云つた風に弟の顔を見返しぬ。母はオホホと笑ひ乍ら、「吉ちやんは？」との言葉を聽くや直ちに「僕は飛行機を造ります」と、七つには些ち長せたる口振りなれど、父の氣象を受け繼ぎて此大希望を抱ける言葉を聞きては又更らに喜ひの情胸に溢れ、「まあ大變大きい偉いお考ですネー、坊やが飛行機を造つたら母さんをも乘せてお呉れかへ」と問へば、吉男は林檎の如き赤き頰は得意と喜ばしさの色を漂はせ莞爾として「ヱヱ、母さんも父さんも、それから偉い強い人をたくさん乘せてお上げ申します」と元氣よく語る罪無さよ。母は唯々言ひ知れぬ喜悅と快感とを覺へて、滿面に笑みを含み、我が子乍ら勝れし心掛けと心窃かに感じつつ、三人の子供を凝視して、「皆三人が三人とも考へは違つて居ますが、みんな大層勝れたお心掛けです、精々勉強して父さんや先生の言ふことを聽いて思ひを遂げる樣にネ」と、それとなく日常の談話の裡にも固き教訓含ませて、彼れ是れと誠の道に引入れつ、是の如くして春の夜を親子四人樂しき團欒に時を忘るゝなり。

噫、此の母と此の子供等の間柄のさても睦ましき事よ。而も現在の血を別けし親子にはあらで、此の奥樣は繼母なり、されども世に謂ふ繼々しき事は更々無くて、眞の親よりも猶ほ懇切に麗はしき愛情を注ぎつ、學校の教師すら三人以上五十人百人の數多

き人の子を恰も我が子の如くに敎へ導くことを思へば、僅か二人や三人の幼兒を敎養するは、人の母として爲すべき當然の務めなりと自覺して、只管子供等の撫育に心血を吝むなし。軈て其日の業を終へて歸らるゝ夫の人も、其親しくも亦密なる母子の間柄を見、母親の優しさを思ひては、さぞや心に滿足し悅びを感ずるならん。

世の誤れる幾多の奥様の中には、或は子に甘く、徒らに淺識なる軟かき慈愛のみありて、眞の高尙なる深き愛情を解せず、**婦徳を損じ社會を益せざる活動寫眞や芝居**などに矢鱈に連れ行き、或は子供の自由にのみ任せて我意を徹させ、我儘を募らせ、可愛い〳〵にて嚴格なる處とては無く、餘りに軟柔に育つるあり、斯かる母親の許に育ちし子供は決して社會に出でゝも奮闘心無く、結局怠惰者として弱者として、終に社會より排斥さるゝに至るが例なり。

又世にはいと慘酷がましき繼母あり。唯己が腹を痛めぬてふ淺猿しき狹き心より、苟しくも我が國家の大切なる國民を虐待するあり、冷遇するあり、幼き子供の落度あるに任せて或は打ち或はつねり、笑顔一つ見することさへせで、何時も外々しき態度もて而かも自分は母親なりと、笠に歸するはあんまりな、甚しきは三度の食事さへ夫に隱して與へぬものもあり、實に人の母として言語道斷の至りなり。之等世間幾多の奥様繼母等も、圖の如き眞に奥様として恥ぢざる良妻賢母の常を思へば、如何に心恥かしき事ならん。諺にも「人は氏より育ち」とやら子供の將來、國家有爲の人たると否とは、主として母たる人の躾に由るものにして、彼の楠正行が母の如き、又孟母三遷

の教の如き、實に子女教育上最もよき參考にして世の子女を持てる母親たるもの特に心得べきことにこそあれ。子を有てる親が單に我が子のみと思ふは誤りにして、苟しくも此の皇土に生を享け居るものは、何れも　大君の赤子、國家の人なれば子女教育の如きは決して忽にすべからず。

それ現代の奥樣たるもの、安逸を貪る無く、家事に奮勵し、夫には忠實にして子女教育の法を誤らず、前記の如き奥樣の美しき心根持ちて、一般婦人の模範となりては如何？

＊　＊　＊　＊　＊

朝未明に床を出で有明けの月を踏み、夕に星を戴きて、閑なく走る車夫の心身は仲仲に一通りのものにては堪ふるべくもあらず、雪深く積りて手足は凍え、つく息さへも眞白く氷るが如き冬の晨、或は鐵石も熔くる暑き日も、嵐は強く大雨激しき泥濘足を沒するの日も、更に休まず、否却つて斯かる時ほど乘客も多ければ、務めの爲めとは云ひながら、人一人乘せて引き行くものなれば、其大儀さは譬ふべくもあらず、車上の客は搖られ引かれて眠り心地の、嵐も雪も炎熱も身には應へず安樂なれど、引く人の身は中々に苦勞千萬の極みなり。

今此圖に描かれたる車夫は、國家の爲め奔走して急ぐ主人の爲め、數日來の足指の傷や體の疲勞も意に留めで、職の爲め客の爲め忠實に引き行く處なり。見よ、車夫の顏色を!!!足の負傷を!!!負けじ魂の雄々しさは、其眼光に表はれたり。今や國家の爲め重任

を帶びて奔走する主人の急用を悟り、身の動く限り足のつづく限り、強き心の張りの糸、猶ほ一しほに引き締めつ、踏みしめ田舍の凸凹道の苦しさも、息さへ吐かず指の血潮は流るれど、物とも思はで唯走りに走り行く。誠に名も無き一つの車夫なれど、汗を出すことに吝嗇ならず、其職務に忠實なるや斯くの如し。是を思へば財あり食足り住居も廣大、學も智も相應に有し乍ら祖先より傳はれる財や地位に甘んじて、心驕り高ぶり、身分相應などとの詭辯を弄して、柔かき衣服に贅澤なる食物を恣にして然も仕事は碌にせず、ブラリ〳〵として逸樂を貪るは天の道に對しても除りに申譯なく、此の車夫に對しても實に恥ぢ入るの次第ならずや？又他の種々の職に就ける者も己が一身の安逸を希ふて忠實ならざるは、神の道にも背けるものにして、●●●●人は働きて●●●●●●●●●●而して生くるものなり。生きんが爲めに働くにはあらずして働かんが爲めに生けるものなり。されば人と生れて眞の人生の意義を悟り、眞に國家を思ふ人は如何なる職業を問はず、總て汗血の吝嗇家たらずして、其業務に働く。凡そ人は何れの仕事、何れの職に拘はらず一度從事せば之を天職として勵まざるべからず。如何許り艱難なる仕事と雖も、こは身體を練り、精神を鍛ふる最良の賜と思ひ、常に天に感謝して之に忠實なれ。然らざれば美事なる成功は期し難かるべし。

幸に本書の愛讀者諸賢には、敢て著者の冗説を待たずして、常に汗を吝嗇ならしめで、百難笑つて之を歡迎し、以て最大辛苦にも神に感謝の意を表し、職に忠實ならんと信じて以て筆を擱きぬ。

第十一圖

大臣と

小間使

第十一章　大臣と小間使

苟しくも春草紙を讀む程の健實なる思想の人は左もなけんも、一般國民の善美なる思想の衰頽せる結果、尊皇愛國心淺く健實の思想亦漸く薄らぐに至らんとす。これ國家の深憂一大恨事ならずや？是に於てか國家を慮ふの士は日夜肺肝を碎きて之が改良と進歩とを圖り、此の恨み多き日下の思想界を如何にしてか救はんとて、滿腔の熱血を濺ぎ國家思想の根源たる　皇祖崇拜の大義を說く志士もあり。或は着鎧武裝まで爲して士氣皷吹に努力する士もあり。或は文章に繪畫に硬思想を說くもあり。是等は何れも國のため誠に慶ぶべき事にして、其至誠の活動は神にも人にも自然ら通ずる所と

なり、世界に比類なき我が國體をして益々尊嚴ならしめ、國民をして精神界上にもいよゝ發揚せしむるものあるや必せり。

尙ほ又此處に思想界をして改良し向上せしむる有力のもの有り。是れなん即ち高潔なる圖書に親しむ事にぞ、蓋し人は周圍の狀況、日夕親しむべき圖書に依りて或は心改まり、或は亂るゝものなり。今の青年男女の裡には狹少下卑なる私己趣味よりして、見るも可厭き西洋の裸體畫などを掲げ自慢顏して之を眺め之を喜ぶ者あるに至りては●●●●●●●●●●●●愚と云ふも限りなきの沙汰なり。又或は書にありても全然何等心身の修養にもならぬば、國家社會を益する能はざる墮文軟文などを讀みて、十二分の愚滿足愚喜悅を感じ知らず識らずの間に惡しき感化や惡影響を受くるものもあり、或は戀愛の眞意義だも知らで徒らに某外國の奸計政略の罠に罹りて「戀愛は神聖」などゝ勝手な熱を吐き、所謂死然主義を崇び拜する輩もあり、深く想へば圖書の吾等に與ふる感化亦至大ならずや。

近時憂國慨世の烈士某氏が、七ヶ年間の苦心編纂に成れるものにして、皇祖の御靈を祀りませる伊勢大廟の御正殿圖及び三種の御神器圖は、思想改良上、國家思想の根源たる　皇祖崇拜の美念を自然に養成するに足るものなれば、之を知りたる某大臣は直ちに是れを求め、此兩尊圖を掲げ以て床の間を眞に日本の床の間らしく崇高威觀たらしめたり。斯くてこの大臣は朝夕に之を崇拜し、猶ほ妻子を始め僕婢に至るまで　皇祖の御稜威の高く深きを思はしめ崇拜の美志養成に努めぬ。又時に觸れ機に隨ひて、

敬神の道を敎へ、常に國家の二字を念頭に置きて以て己が職務を完ふせんと心掛け居れり。尙ほ又大臣は敬神尊皇の國士を自邸に招き、平素陋屋粗食に甘んじて日夜國家の爲めに奔走せるの勞苦を慰め、之を優遇し、之等の志士と思想改良上の連鎖を取り、國家を語り以て我が國家社會の幸福と發展とを計りぬ。而して大臣を始め他の志士連は出づる時も入る時も常に床上に掲げまつられし兩尊圖の前に座して、伏し拜むを例とせり。聞く人或は謂はん。「そは餘りに具體的形式的にはあらざるか」と、さは云へ、凡そ人は如何なる事も其行ひに發揮せざれば眞實とは稱えがたし。假令ば此處に一人の僞紳士あり、「我は慈善心厚く同情心にも富めり」と人に語り誇るとも、雨降りしきる黃昏に盲目なる老母の手を引きたる身態いとさもしげなる幼子が道に來懸りて

「何分の御慈悲を」と乞ひ願ふの時、見苦しき體たらくに先づ厭氣起り、樣子も尋ねねば惠みもせで素知らぬ顏に過ぎて行くが如き事あらば、そは前に吐きし言に全く反して、同情心もなければ又慈善心なども露ほどもなきこと明かなり。又若し茲に正義を口にする人ありとも、其行ひに於て講僞錄販賣を爲さんに、中學校に登校せしと同一の効力ありとか小供ダマシにも出鱈目の廣告を爲し、或は郡視學や校長などに飮食物や書冊等の贈賄して好評を願ふが如き不正義の行爲あらんか、如何に誇大の建築を成すほどに田舍の靑少年の金は絞ぼり得たりとするも、其人格やゼロなるに非ずや。又此處に一官吏あり「予は社會の風潮に鑑みて衰頽せる思想改良を期するものなり」と謂ひ、又「敬神尊皇の念厚し」と云ふも、若し夫れ人知れず花柳の巷に足踏みし、

或は私慾を逞ましうするが如き、將た又神の御前を通る時敬禮だもせず、又己が本分を忘れて充分に働かざるが如き事あらば、思想改良とか敬神尊皇とか云へる堅き精神のなきことを行ひによりて證せるものと謂ふべし。

又若し茲に僞政治家ありと假定せよ。民間に在るの時代は廢稅論などを盛んに演說して大ひに人民に阿諛し、其一朝運好く大臣にでも成り着くや、廢稅どころか減稅の演說だも一度も爲さゞるが如き者若し在らば、全く其言行の形式に於て國民を欺き愚弄したるを證すると同時に人格の下劣なるを證するものに非らずや。さればこそ人は各其形式動作に依りて其心意は確然たる明證となるものなれば、善は實行に發揮してこそ始めて眞價ありと謂ふを得るなり。故に尊皇國家的の圖書などに趣味を有ちて之を購ふの餘裕をつくり、以て自身先づ　皇祖崇拜の美志を行ひに發揮するが如きは、眞に日本臣民として恥ぢざるの人なり。今此圖に示されし大臣の朝夕の實行を見ば、如何に尊皇思想に富み且つ國家を思ふの士なるかを知り得べし。げに高き美しき心の大臣なるかな!!!

*　*　*　*　*

あはれ、優しき小間使よ。年も若く、學びの道にも深き智とては有らねども、常々主人の嚴格なる敎訓に心自づからいみじく向上し、眞白き襟に汚れ附かぬ衣のまゝ、華麗なる裝などは凝らさねども、何とはなしにすぐれて見ゆる床しさよ。疊に音せぬしとやかなる禮儀作法に、三つ指正しく主人に茶を運び、軈て、襷を取りはづし、髮の

ほつれを靜かに搔き上げ、床上に嚴そかに飾られし兩尊圖の御前に額づき、さて丁寧に伏し拜みぬ。

春風暖かく室内に流れ入り、床の間の松の綠と白き梅花は其色一際に美くしく見えられたり。

あゝ唯一人のこの小間使までが、主人に倣ひて一寸したる平素の行ひに迄、敬神（皇祖崇拜）の美くしき心を發揮せるとは!!! まことに國家乃至は社會一般思想改良上に於て眞に慶びに堪え得ざるの事なり。「上の爲すところ下之に倣ふ」とは古よりの格言なり。高位高官の人より、下一般の人々擧つて敬神尊皇の美風を實行し併せて形心一致の眞國民とならざれば衰へ果てたるこの思想界を改良し進歩せしむること中々に容易ならざるなり。大臣と小間使と題して以て大方諸彥の正しき御良心に訴ふるのみ。

第十二圖

醫者と

患者

第十二章　醫者と患者

紅き花、眞白き花に黄なる花、さては紫の花などと、何れ劣らぬ春の花、初吹く東風の慈愛受け、いと風情有り氣に咲き亂れぬ。

そが中にも特に異彩を放てるは、朝日に匂ふ櫻花、氣高き姿のなつかしさよ。遠近の名所に微笑み初むると聞くや、帝都幾萬の人心俄かに色めき渡りて浮き立ちぬ。雪や冷たし、風や寒し、火鉢にのみぞ憑りそひて、兎角狹き一室に引き籠り勝ちに、明かし暮せし冬の季に、十二分の倦怠と嫌厭とを催して、春や疾く來よ、花や疾く咲け。と、ひたぶるに待ち憧憬れし人々のホープは時の流れに從ひて此處に叶ひぬ。

あか〳〵と虚空に高く笑み給ふ太陽の御光り、之のみにても春の陽氣さは溢れしものを、更に又緑柔かき若草の上をそよ吹く風の音も、唯長閑けく晴々し。

蜘蛛の巣を張りたる樣な電線に、留まりて鳴く小鳥の群れも次第に其數を増し、街路に往來する人の足音も亦繁くなりぬ。

殊に此の二三日は、猛き大丈夫の心も強き男子の思も、自然からなる美くしき色香妙なる花に傾きて、昨日も今日も花見の客、小金井飛鳥山、さては向島上野公園などと、櫻花の名所〳〵をあさりて各がじし、歩を向け足を運びつ、一日の暇を借りて花に醉ひ、薫りに深き憧憬れをやり、日頃の辛氣を慰めんものと。

此處は何處か向島、淡紅の花の下に、老母の手を引きて歩む優乙女、飾りも何も身に附けねど、親思ふ情の顔に溢れて、下げ髪に結びし古き赤色のリボンの風にヒラヒラ舞ひて、可愛ゆしとも可愛し。

又幼き子を背に負ひて、眠れよ眠れと小聲に吟みつゝ、花見る可憐の子守もあり。木綿袴をキチンと着けし眞面目なる學生もあり。或は商賣の傍ら、一寸の暇を盗みて花に心を慰めんと、草鞋の紐を引き締めたる風情、角帶チャンと結びたる姿などは、唯遊興に時を忘れ、無暗に高き價の絹物など纏ひて、チャラ〳〵歩む奢侈連中よりは、遙かに勝りて床しう將た美くしく見ゆ。

此處は都の生存競爭の最も激しき神田區北神保町てふ、電車通りの附近に、醫院の表札をかゝげ、硝子障子の奥懐かしく、鉢植ゑの蘭の香りも内より洩れて、何れは普な

らぬ心の人と推せらる。

障子押し開きて出で來りしは此の家の主人か？　皮膚の色は男子らしく筋骨は引き締り、眼に言ひ知れぬ慈愛の光り籠りて、年は早や四十越したる快男子なり。

書生らしき青年を呼びて「之から久し振りで友人を誘うて飛鳥山方面へ花見に行き、數日來の勞を慰めたいから留守をしつかり賴む」と云ひ置き、西洋下駄の磨かれたるを無造作に穿き、ステッキ持ちて今や出懸けんとせし折柄、氣魂々しく鳴る呼び鈴の音に、何事ならんと書生をして聽かしむれば、大病人あるとの使來りし由、之を聞きて醫師は花見も何も忘れ果て、早速使ひの人を呼びて病人の容態を仔細に尋ぬるれば、「心臟病にて殆んど生命も覺束無く然も貧困者にて如何ともなすべき術なし」と語るを聞きて、ハッと許りに吐胸を突かれ、道具や藥持ちて自轉車に乘るも忙がしく、驀進に其病人の家にと駈けつけぬ。

見れば町の端づれ、家とは名のみの九尺二間の裏店住居、僅かなる荒物店を出して、今年漸く九才になりし孝行息子の評判高き一人の男子の子を相手に商賣大事に勵み居りしが、昨年の秋かりそめの風邪が原因とやらにて、今は起居も自由ならぬ心臟病、素より貧に追りし暮し故醫師に掛る事も覺束無く、病はいよゝ重りて早明日〳〵をもと案じらるゝ折柄、神田北神保町邊に神田醫院とか云へる親切眞面目なる名醫ありとのこと洩れ聞きて、今し貴家樣迄、使ひの者を走らせました次第」と傍なる病人の友人らしき人の語るを一分始終聞き終り、一しほの憐れみを感じ、且つは此病人の正直

眞面目なると、其子の孝心厚きとに深くも同情し、いと懇ろに診察終へて後、即座に店は附近の心易き人に任せ置き、車一臺命令して其病客を乘せ、我が自宅にと連れ來りぬ。

斯くて醫師は病人を自宅に連れ來り、常々は客間と定められたる奥の日當りよき六疊の間に、書生と共に寢臺や寢具を運び室内を取り片付け、以後は病人の居間と定め、寸秒の油斷無しに眞心罩めて手當を怠らず、親切に治療を施しつゝあり。

今の世の人概ねは私慾にのみ走り、徒らに暴利を貪らんとする淺猿しきが中に、かかる神の如き人、そも幾人ぞ。況して現今の多くの醫師は藥九層倍とかの言葉に洩れず、頗る利益を貪るとか聽けど、此の醫師は頑聖を保ち敢て暴利を貪らんとの穢き心は微塵も無く、貧者なりとて正義の人には殆ど無料にて診察治療を施し、其の懇切や至らざるなし。且つ藥代等も極めて安價を旨とし、「醫は仁術を以て本位とす」てふ古諺に毫も恥ぢざるの良醫なり。かかる醫師なれば從つて醫學には專心、學理を實地に經驗し、如何なる難病をも治するの蘊奥を極めんと日夕心を碎きつゝ。されば醫術は極めて委しく巧妙にして、其効果著しく遠近傳へ〳〵て日に數十人の病客あり、何れも此の名醫を賴りて來ると。

げにやこの神の如き慈愛の人に救はれし正義眞面目なる此貧病客は、さしもの難病も日增しに快方に趣きつゝある己が身體を打ち眺めて、嬉しさに嫣然と微笑みつゝ、床の間に生けられし花瓶に一輪咲ける椿を、窓より洩れ入る夕風のそよとしてかすめたる

を見入り、深きよろこびに時を忘れぬ。

かくて見舞に來りて何くれとなく慰め注意して去りし醫師が、計りも知れぬ切なる情けに、患者は全身より湧き立つ感謝の涙、双眼よりハラ〳〵と溢れ落ちて禁ずるよしもなく、思はずも兩手を合せ、

「おお神よ、我をして再び健康なる體となし給へ、而して、現世に稀に見る彼の良醫師に對して、眞心よりの感謝の叫びを實現し得るの榮を與へ給へ」と。

因に此醫師は前にも述べし通り、醫術には非凡の手腕あり且つ正義の人なれば、世の產婆看護婦會を憂ふる公衆は、頻りに此模範的人物の醫師に乞ひ、產婆看護婦養成所の設立を勸めしに、多忙なれど此醫師は其を拒まず設立し、常に熱誠なる敎授の下に生徒の學修も他に優りて進み、毎度官憲の試驗に及第生のみを多く出し、好評嘖々たり。斯くも効果ある養成所の好評は人から人へと評判され、入學生は日に月に過多となり、入學申込の遲れたる者は餘席なき現狀に付き、世の產婆看護婦生として成功を望む者は皆々競ふて、二三ヶ月以前から此神田醫院の養成部に入學願を爲し置くと云ふ。

男女春草紙　終

附錄

文語と思想

一名　注意すべき字語
一名　むき出し文語
一名　文の皮剝き
一名　注意すべき文語
一名　文のマル剝き
一名　研究すべき文語
一名　文語の用途
一名　文の剝き出し
一名　文語の使途

文語と思想　目次

緒言……一頁
第一　紳士淑女（奢侈者ニ非ズ）……四頁
第二　文藝（墮藝ノ事ニ非ズ）……六頁
第三　閣下、君、僕、様、殿　用途ヲ知ラザル者ノ耻）……一〇頁
第四　教育（教授ヨリモ博シ）……一二頁
第五　舶來（大ナル下駄ニ乘セテ來ル）……一五頁
第六　男女（東西ノ如ク南北ノ如ク隔然）……一八頁
第七　白兵戰、接戰、激戰、合戰……一九頁
第八　趣味（墮味トハ異ル）……二〇頁
第九　草紙、春、秋、（共ニ不奇拔）……二一頁
第十　自由と勝手（トハ異ル）……二四頁
第十一　「我田引水」の用途……三〇頁
第十二　愛（大愛ト小愛、大ハ小ヲ兼ヌ）……三五
第十三　修養……四三
第十四　吝嗇家（汗ノ吝嗇家）……五一
第十五　名譽と名聲（道鏡モ清盛モろつくふゑらーモでーるどモ其他名聲家ハ多々アル）……五四
第十六　不能、勞動（勞働ナル文語ヲ葬レ）……五八
第十七　勉強（勉學ヲモ勉強ト謂フ）……六二
第十八　學者（頭字ノ附ケル幾多種類ノ學者）……六三
第十九　家の衞生（藥ヲ買ハズトモ出來ル衞生）……六五
第廿　節操（男ノ節操美ニ（僞志士や小倉女等は一層謹讀を要す））……六九
第廿一　苦學生（樂學生、勇學生）……七七
第廿二　男女同權（義務多キ男子界ヨリノ希望）……七九
第廿三　誇大（僞大ヲモ含ム）……八六

第廿四　新聞……九四
第廿五　理想（空想、妄想トハ異ル△高キ理想ト卑キ理想）九八
第廿六　粗製濫造と多冊濫著（賣名學者ノ不誠意）……一〇四
第廿七　熟慮斷行（短氣ト曲稱スルハ不可）……一一五
第廿八　干渉（當然ノ職務執行ハ普通ノ事也）……一一八
第廿九　肩書……一二一
第卅　元氣活潑と亂暴……一二五
第卅一　人格（神格、人格、品格、資格、財格、辯格、名聲格、價格）……一三一
（い）道途ニ於テ發揮セル人格……一三九
（ろ）訪問ノ際ニ發揮セル人格……一四〇
（は）友人ノ厄難ニ際シ發揮セル人格……一四一
（に）見解ニ於テ判明セル人格……一四二
（ほ）借財ニ於テ發揮セル人格……一四八
（へ）床ノ間ト櫺間ト書齋等ニ發揮セル人格……一五二
（と）職業撰擇ノ心根ト人格……一五六
（ち）談話ニ於テ發揮セル人格（女の腐つたのや僞志士等も謹讀改行しては如何）……一五八
（り）財ノ使途ニ於テ證明セラル、人格（僞志士連顏色ありや）……一六一
第卅二　閥……一六七

緒言

世ニ所謂學者ヤ所謂識者ハ頗ル多イ、而シテ世間滔々士氣衰退ト奢侈淫風ニ流レルヲ痛嘆スル者ハ在レドモ之レヲ根本的ニ改革セントスル實行ノ士ハ極メテ少ナイ樣デアル。然ラバ唯痛嘆バカリシテ滔々タル現代非文明ノ惡風潮ノ社會ヲ根本的ニ改革セズ此儘ニ放任シテ措イテ可イモノカ？不可モノカ、此所ハ人間ノ形ヲ成シテ人間ノ心ヲ有シテ居ル人々ノ少シハ考ヘテ見ネバナラヌ所デアル。無論有効犀利ナル改革法ノ現ハレテ半文明ヲ眞文明ニ進歩向上セシメ度イコトハ憂世慨國ノ士ノ望ム所デアリマセウガ此ノ根本的改革ノ重任ニ當ル人ガ未ダ天下ニ多ク現ハレナイノハ吾人ノ切ニ遺

憾トスル所デアル。

何ガ故ニ根本的改革ノ重任ニ當ラントスル實行ノ志士ガ尠イカ、其故ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ多大ナル犧牲ヲ要スルカラデアル。例ヘバ出版物ナラ出版物ヲ以ラスルニシテモ紙代、印刷費、製本費等ノ外ニ一寸素人ノ想像シ得ザル巨額ノ廣告費、事務所費、著作費等多大ノ私財ヲ初メカラ抛タネバナラヌ。又時ニハ或批難ヲモ受ケル犧牲的覺悟モ要スルカラデアル。斯ル偉大ナル美擧ハ到底凡人ノ爲シ得ザル所デアッテ、須ラク眞ノ志士仁人ノ擧ニ待タネバナルマイト信ズ。

抑モ奢侈淫風ノ惡風潮ノ止マザル原因ハ種々アリト雖モ、世人ノ等閑ニ附シ居ル一大原因ハ實ニ文語ノ用途ヲ誤レルト見解ヲ誤レルトニ起因スルノデ、要スルニ惡風潮ノ罪ハ感染者其者ノミニ非ズシテ、惡風潮ニ抗スルノ勇無キ即チ濁俗ニ阿諛セル所謂●●●●●●●●學者所謂識者ガ亦其根本的重大ナル罪責ヲ有スルノデアル。

吾人素ヨリ淺識不學ナリト雖モ、地球上ノ一員タル此身ハ、世界中最モ稜威高キ此皇土ニ生ヲ享ケ居ル者ナレバ當然世界的國家本位ノ觀念ヲ以テ現代ノ風潮ヲ傍觀默視スルニ忍ビズ、半文明ナル現代ノ惡風潮ガ!!文語ノ一般解釋ト用途トヲ誤レルニ一大原因スルヲ看破スルト同時ニ、進ンデ之レガ改革論ヲ敢テシ、以テ聊カ國家社會ニ貢献スル所アラント思ヒ起チ、現代ノ惡風潮ニ抗シテ徐ロニ今回ハ左ノ數句ヲ世ニ公ニスルコトトシマシタ。敢テ世ノ所謂學者所謂識者ノ諸君モ屈理屈ハ御廢メニナッテ、眞ニ國家社會ノ爲メ文語ノ使途ヲ誤ラヌ樣切ニ希望スル次第デアリマス。

第一　紳士淑女（奢侈者ニ非ズ）

『紳士』『淑女』トハ風采ヲ目シテ謂フ可キモノデハナイ、又口辯ノ達者ナ人ヲ稱スルモノデモナイ、又質朴ナル田舍人ノ眼ヲ眩惑セシムルガ如キ華奢誇大ナル建築物ヲ有スル人ヲ紳士ト稱ス可キモノデモナイ。

紳士トハ君子ト云フコトデアツテ、世界同民中ノ銀色人種間デハ之ヲ「ぜんとるまん」ト言ツテ居ル。即チ**溫厚篤實ナル**人ヲ紳士ト謂フ可キモノデ、淑女トハ**淑德ノ婦人**ヲ稱ス可キモノデアル、銀色人種ノ人スラ此邊ノ稱語ハ解シ居ルノデアルカラ、金色人種ノ人々モ亦敢テ人ノ風采ヤ誇大ナル耶麼師的ノ建築物

ナドニ住ム者ヲ指シテ矢鱈ニ紳士淑女ナドト誤稱誤解セズトモ可イノデアル。若シ溫厚篤實ノ男ヤ質素淑德ノ婦人等ヲ紳士淑女ト正稱正記セズシテ、衣食住ノ奢侈ナ男女共ヲ、紳士淑女ト曲稱誤記スル者ガ多クナレバ多クナルホド、國家社會中ニハ溫厚篤實ノ士ト質素淑德ノ婦人ハ自然ニ減少スルニ至リ奢侈淫風ノ徒ガ益々增加スルノデアル、文語ノ使途豈深ク留意ス可キ事デハナイカ。

因ニ銀色人種トハ白色人種ノコトデ、金色人種トハ黃色人種ノコトデアル。金ト銀トトハ何レガ上等デアルカハ今更ラ吾人ガ玆ニ說明スル必要モアルマイ。

第二　文藝（墮藝ノ事ニ非ズ）

世ニ舶來妄想狂ナルモノアリテ、有益ナラザルモノマデ何デモ彼デモ舶來ノ事物ヲ妄拜シ妄信スルモノガアル、甚シキハ眞理ヲ顚倒セル諸種ノ無益ナ學說マデヲモ左モ横文字デ眞面目ラシク書イテアレバ、輕卒ニモ好奇ニモ直チニ其ヲ拜シテ和文ニ飜譯シ、軟骨青年ノ思想ヲマデ惡化セシムル者ガアル、是レ其書キ觸ラシ言ヒ觸ラス者等ガ自己ノ奇名ヲ博セントスル陋劣ナル醜慾心カラ致スノカ、又ハ其者自ラガ大和魂ノ本場ニ生ヲ享ケナガラ軟骨者ナルガ爲メ、憫然ニモ脆クモ軟化シタノカ、或ハ白紙ヲ活字ニ染メテ多ク賣ラントノ潛慾心デ致スノカハ知ラネドモ、醜原書代金ヲ場末ノ地方（即チ現代外國ト稱スル地方）ニ流出セシメタ上ニ、文語ノ惡變化乃至思想界ヲマデ徐々ト攪亂シ惡化セシメラレテハ堪ッタモノデハナイ。

抑モ「文藝」ト云フ文語ハ如何ニ世ガ半文明ナリトテ、世人ヲ往々奢侈墮風ナラシムルコトノ多キ芝居ノ脚本ヤ小說ナドノミヲ目シテ偏派的ニ文藝ト稱スベモキノデハナイ、須ラク文筆ヲ以テ武界ヲ說キ、或ハ尊キ思想ノ和歌ヲ草シ、或ハ實業ヲ說キ、或ハ宇宙ノ眞理タル日本ノ皇道ヲ敎ヘ、或ハ此等ヲ奬勵スル場合等ニ文筆ヲ以テスル技藝ヲ文藝又ハ文業ト謂フ可キモノデ、日本外史ヤ十八史略ノ加キ文章軌範ノ如キヲ書ク技モ文藝デアル、然ルニ半文明ノ今日デハ咎メル人ノ無キヲ幸トシテ、墮風滔々タル勢ニ乘ジテ＝此重大ナル文藝ト云フ文語ヲ墮藝方面ノミニ使用シテ得々タルモノガ

アル、而シテ最早凡夫俗象ヤ下級官吏等ヲシテ、芝居ノ脚本ヤ小説等ヲ指セル一定ノ熟語ノ如クニ感ゼシムルニ至ツタ樣ニ觀ヘル、此罪ヤ今迄ノ狡ルイ學者ヤ之ヲ咎メモセヌ鈍氣ナ官憲ニモ存ズル所ガ多イノデアル、要スルニ文藝ト云フ文語ハ、文筆ヲ以テ世ヲ益スル事ノ多キ方面ニ使用スルヲ可トスルノデアル、若シ夫レ農藝工藝ノ如キ國家社會ニ必要ノ藝デスラ、紙上ニ記スルニハ文ヲ以テスルモノナレドモ、文藝トカノ稱語ハ用キズシテ農藝、工藝、農業、工業等ノ稱呼デアルモノトシタラ、芝居ノ脚本ヤ小説ナドヲ稱スルニモ、敢テ牽强附會的ニ文藝ナド、曲稱セズトモ可イ事デアル、又芝居ノ脚本ヤ文弱化セル小説ナドヲ書ク者ヲ目シテハ脚本書キ又ハ小説書キ、或ハ**文弱屋**ト謂フノガ正當ノ稱語デアルノニ、之ヲ曲稱シテ文士ナド、言フ徒輩モ

アルガ、士風士魂ヲ有スル文章家ヲ文士ト稱スルノハ差支ヘモ無イケレドモ、士魂ノ欠ケタル文筆者ニ妄リニ**士**ノ字ヲ附與スル必要ハ無イノデアル。

若シ文ヲ以テ國家社會ニ比較的有益ナル物事ヲ書キ現ハス全體ヲ文藝ト謂ヒモセザル今日、何所マデモ墮藝方面ノ脚本ヤ小説等ノミヲ曲ゲテ文藝ナリト稱シ、或ハ墮藝方面ノ文筆者ヲ文士ナリト抵抗主張スル者アラバ、其ハ唯自己ノ城ノ保タレンコトヲ欲スルノ餘リ一種ノ詭辯ニ過ギナイノデ、恰モ不正義ノ軍ガ正義ノ名ヲ被リテ籠城シテ、健全派ノ眼カラ觀レバ眞ニ憫笑ニ堪ヘナイノデアル。

讀者ヨ世人ヨ、諸士モ悉ク思想ノ健全者タラントノ向上心アル以上ハ、直チニ即日

ヨリ終生健全ナル思想者タリ得ルモノナレバ、文藝テフ文語モ勗メテ高善ナル方面ニ使用シ以テ國家社會ヲ裨益セラレン事ヲ希望ス。

第三　閣下、君、僕、様、殿、

（用途を知らざる者の恥）

「閣下」トハ、先ヅ現代ノ官界デハ親任官、勅任官、及ビ人爵ヲ有シテ居ル人ニ向ツテノ稱語ト定マツテ居ルガ、民間デハ誰デモ己レノ崇拜スル人ニ向ツテ言筆ニ表ハシテ可イ敬稱デアル。

面談ノ際ニ「君」トカ「僕」トカ稱スル語ハ、必ズ自分ト同等若シクハ同等以下ノ人ニ向ツテ表現スベキ稱語デアツテ、決シテ自分ヨリ眼上ノ人ニ向ツテ言フベキ稱語デハナイ、往々田舍者ヤ都會ノ那魔意氣ナ青少年ノ中ニハ、未ダ自己ヨリ上ノ人カ下ノ人カモ判ラヌ初對面ノ時ナドニ、妄リニ「君」トカ「僕」トカノ發言ヲ爲スコトガアルガ、此レハ自ラ文語ノ使用法ヲ知ラヌ證據ヲ發揮セル者デアツテ、對者ノ心中ニ蔑視サレルコトガアルノダ、然ウデアルカラ未ダ自分ヨリ上ノ人カ下ノ人カガ判ラヌ内ハ決シテ「君」「僕」ノ稱語ヲ發シテハナラヌノデアル、然ラバ如何ニセバ可イカト云ヘバ、先ヅ自分ヨリ年モ人格モ上カ下カガ判ラヌ内ハ尊稱ノ語ヲ發スルガ可イ、即チ「あなた」トカ「私」トカノ敬語ヲ以テシタ方ガ其發言者ノ人格モ對者カラ尊敬視サレルノデアル。

「**樣**」ト云フ文語ハ、自分ヨリ上ノ人ニ對スル尊稱語デアツテ、「**殿**」ト云フ文語ハ自分ノ子ヤ弟妹ヤ其他眼下ノ知人ヤ雇人等ニ向ツテ表現スベキ禮儀的ノ文語デアル、雇人トハ自家ノ個人的雇人ノミナラズ國家ノ雇人モ雇人デアル、故ニ國家ノ大小機關タル所ノ職務ヲ掌ル人人（即チ公僕）ニ對シテモ「殿」ト云フ禮儀的ノ文語ハ記稱シテ可イノデアル。

第四　教育（教授ヨリモ博シ）

世ニハ教育ト云フ事ヲ錄ニ知ラズシテ、彼ノ人ハ教育ガ有ルトカ無イトカ云々言フ人モアル樣ダガ、抑モ教育トハ家庭教育ノミヲ指シテ謂フ可キモノデモナケレバ、緊要ナ社會教育ノミヲ謂フベキモノデモナイ、又學校教育ノミヲ目シテ謂フベキモノデモナイ、教育トハ如上ノ三教育ヲ總稱シテ一口ニ教育ト云フベキモノデアル、凡ソ人間ハ僅々百年カ二百年カノ一生涯間ハ教育ヲ受ケネバナラヌノデアツテ、死後無限年ノ久シキ後マデ影響ス可キ、即チ取消シノ出來ザル人格名譽等ハ、各自其短期間ノ一生ニ於テ修養セネバナラヌモノデアル、而シテ如上ノ三教育中、人生ノ實力養成ニ最モ必要ナルモノハ何カト云ヘバ、無論社會教育デアツテ、此社會教育ニ於テ人間ノ落第者モ級第者モ陸續現ハレルノデアル、是ニ於テカ或人ハ社會教育ヲ充分ニ受ケザル人ヲ目シテ「教育ぜろ」ノ人ト蔑稱スル人モアルケレドモ、此ハ餘リニ慘酷ナ命稱デ餘リニ進歩シ過ギタ時代ニ用フベキ稱呼ト謂ハネバナラヌ、併シ籠ノ鳥然タル學校教

育ノミヲ受ケタカラトテ、境遇ヤ其他ノ事情ニ依リ社會教育界ニ入學スルコトノ遲レタ者ヲ、人間ノ社會ニ於テハ、**教育不足者**」ト謂フノガ至當デアル、要スルニ教育トハ家庭教育、學校教育、及ビ最大最要ノ社會教育ヲ總稱シテ一口ニ教育ト謂フノガ至當デアル。

因ニ　明治天皇ノ吾等臣民ヲ慈シミ給フノ餘リ明治二十三年ニ御降シ給ヘル御勅語ハ、吾人臣民ガ各自一生涯遵奉スベキ誠ニ有リ難イモノデアルカラ、之ヲ奉稱シテ「教育勅語」トモ謂フノデアル、然ルニ此人生ノ教育勅語ヲ學校内ニ於テノミノ教育用カト**狹ク誤解シテ居ル不敬者**モ稀ニハアルソウダガ、尊キ勅語ハ決シテ斯ル狹イ意義ノモノデハナイ、教育ナルモノヲ狹ク誤解スルモノハ未ダ**教育ナルモノガ人生始終ニ亘リテ居ル**モノダ、ト云フコトヲ識ラヌカラデアラウ、ふれでりつく曰ク「教授は教場に終り教育は唯生命と共に終る」ト、既ニ辨ヘタル人々ハ此教育ナル文語ヲ口ニデモ筆ニデモ表ハスニハ注意スルガ善イ。

第五　舶來（大ナル下駄ニ乘セテ來ル）

「舶來」ト云フ事ヲ說クニ當ツテハ、先ヅ下駄、草鞋、靴ナドノ事カラ說明セネバナラヌ、抑モ草鞋トカ靴トカ下駄トカ云フモノハ、人間ガ一人ヅヅ乘ツテ步クベキモノデ、汽車トカ船トカノ如キハ一時ニ多數ノ人間ガ乘ツテ往復スル大ナル下駄デアツテ、

唯機械ノ附イタ下駄デアル、故ニ汽車ハ陸上ノ下駄（若シクハ靴、草鞋）ト云フ意義デ、**船ハ海ノ下駄**（若シクハ靴、草鞋）ト云フ意義ヲ有シテ居ルノデアル。

「舶來」トハ斯ル下駄（船）ニ乘セテ所謂外國カラ來タモノヲ謂フノデアッテ、其思想ヲ舶來思想ト謂ヒ、品物ヲ「舶來品」ト稱スルノデアル、元來舶來品ナルモノハ、品ハ劣等デモ又若シ眼ニ見ヘヌ惡疫ガ附着シテ居テモ、實ニ驚クベキ**高率ナル海關稅ヤ、運賃ヤ、幾多ノ外商ノ手ヲ經テ來ルノダカラ非常ノ高價トナラザルヲ得ナイノデアル**、故ニ舶來品ト云フ事ヲ別ニ分リ易ク言ヘバ「**馬鹿ラシイ高價ナ品物**」ト云フコトデ、遙カニ內地製ヨリモ實質ノ劣レルモノデモ外國製品ハ皆舶來品デアルノダ、然ルニ未ダ此實狀ヲ識ラヌ淺學無智盲眛者ト、狡猾ナル商人等ハ恥ヲモ關ハズ舶來ノ奢侈品ナドヲ賣買スル馬鹿氣タ者モアルソウダ、併シ吾人ハ產業上必要ナル研究ノ資トナルベキモノマデヲモ排斥スルト云フ譯デハナイ。

因ニ內地製ノ品物ハ、如何ニ實質ノ好イ品物デモ、海關稅モ掛ラネバ、又幾多ノ外國商人ノ手ヲ經ズニ內地デ廉價ニ賣ラレルカラ、自家ヲ愛シ國ヲ愛スルノ識者ハ、近來皆自覺シテ、內國製ノ品物ヲ購買スル美風ガ盛ンニナッタノハ慶バシイ事デアル。

第六　男女（東西ノ如ク南北ノ如ク隔然）

東ト西トハ正反對ノ方向デアルケレドモ字ヲ續ケテ東西ト云フ事アリ。又南ト北モ正反對ノ方向ナレドモ字ヲ接續シテ南北ト書クコトガ多イ。

男女ト云フ事モ、斯ク東西トカ南北トカ言ヘルガ如ク、判然トシテ隔然タル意味デナケレバナラヌ事ハ世人モ既ニ知ル所デアラウ、故ニ男女ト云フ文字有ルヲ見タナラバ向上セル思想ノ下ニ多ク之ヲ**隔然タル意味**ニ解スルト同時ニ**高尚ナル意味**ニ解スルヲ至當トシ、又其使途ニ於テモ隔然タル意義ノ方面ニ使用スルコトノ多キヲ可トスルノデアル、決シテ卑猥ナル方面ニ曲解シテ可ナルモノデハナイ、又決シテ卑猥混交的ノ場合ニ誤使用シテ國家社會ヲ益スベキモノデハナイ、敢テ半文明的ナル卑猥方面ノ誤使用ハ廢メテ眞文明ノ法官等ノ如ク世人モ高善ナル思想ヲ以テ正解シ亦正善ナル方面ニ使用スベシダ。

第七　白兵戰、接戰、激戰、合戰、

此四文句ハ武道的ノ文語デアルカラ、**當然武道界ニ使用スベキ稱語**デアル、即チ劍道、柔道、戰爭ナドノ方面ニハ勿論相撲ナドニモ使用スベキ文語デアル、決シテ世ヲ益セザル卑猥ナル方面ナドニ用ヒテ可ナル文語デハナイ、故ニ若シ此四文語ノ上部ニ男女ナル文字デモ附シアルヲ見タナラバ、當然之ヲ武的ノ

事ト解スルノガ正當デアル。

第八　趣味（墮味トハ異ル）

「趣味」ト云フコトハ「高尚ナル思想上ノ好ミ」ト云フコトデアッテ、決シテ卑猥メカシキ意味マデヲ含ンダ下劣ナ文語デハナイ、故ニ此趣味ト云フ高尚ナル文語ハ武道界ノ接戰デモ何デモ比較的國家社會ヲ益スル事ノ多キ方面ニ使用スルヲ可トスルノデアル、半文明ノ今日世ノ國家社會ヲ想ハザル

慨ムベキ曲學阿醜ノ所謂文死連（人兎モ角）

潛在セル幾多天下ノ志士ヤ操觚者、教育家等ハ此ノ「趣味」ト云フ文語ノ用途ニハ特ニ勗メテ留意シ以テ世人ヲ善ニ導キテ不可アルマイト思

フ、苟ニモ墮藝墮味ノ方面ニハ此趣味ヲ濫用セヌ樣ニ願イ度イモノデアル、又讀解者ノ方デモ趣味ヲ文字アルヲ見バ、當然高善ナル方面ノ事ト觀察スルヲ可トスルノデアル、若シ夫レ芝居ノ廣告デモ書籍デモ、高善ナラザル事ヲ濫リニ「趣味」ナドト曲曲解記シ、或ハ觀覽者ニ於テモ卑猥メキタル事ヲ趣味ナドト誤稱スルガ如キ劣等思想ノ男女アラバ、國家社會ノ機關タル官憲ハ、ドシ〳〵容赦ナク處罰ヲ重クスベシダ。

第九　草紙、春、秋、（共ニ不奇拔）

辭林ナドニモアル通リ、世間ニハ既ニ能ク解シテ居ル人モ多イダラウウガ「草紙」

トハ「物語リナドノ冊子」ト云フ事デ、又手習草紙ノ事ヲモ云フ、別ニ深イ意味モナケレバ奇ナル意味モナイノデアル。

「春」トハ草木ガ青々ト芽立チ、氣候ハ好ク人モ働クニ最モ都合好キ時デアル、故ニ人生一代中ノ最モ體育ノ發達スル二十歳前後ノ時代ヲ恰モ青々タル草木ノ榮ヘル時候ノ春ニ例ヘテ青春ノ青年ト云フ熟語モアル、左レバ青年ハ各其志ス善ナル方面ニ專心熱誠ヲ以テ奮勉セネバナラヌノデアル。

「秋」トハ草木ガ既ニ綠ヲ去リテ、淸キ空氣ガ枯葉ヲ落シ去ル時候デアル、而シテ農作物モ熟シテ收穫ノ好時機デ郊外マデ人出ガ盛デアル、且ツ馬ハ肥エ天ハ高ク淸ラカニ、人ハ將ニ來ルベキ嚴寒ヲ迎ヘテ戰ハントシテ勇氣ニ滿チ、眞ニ人ノ身心ヲ樂マシムル時デアッテ、決シテ悲觀スベキ文語デハナイ。「草紙」トカ「秋」トカ「春」トカ云フ文語ハ、之ヲ實業界、學術界、敎訓的方面等ニ使用スルコトノ多キ文語デアル、故ニ健全ナル思想ヲ有スル官民ハ上記ノ如キ文語ガ假令半文明ノ今日如何ナル文語ト接續シテ居ルノヲ見テモ聞テモ醜劣ニ曲解セズニ、**以テ當然正解**スルガ可イ、殊ニ文語ノ使用者ハ**重ンジ**一層注意シテ、眞ノ文明人士ラシク國家社會ノ爲メニナル樣ナ方面ニ用ヰネバ世ニ思想上ノ害毒ヲ流スニ至ルノデアル。

向上進歩セル頭腦ヲ人生道德ヲ

第十　自由と勝手（トハ異ル）

世ニハ「自由」ト「勝手」トノ區別ヲ識ラズシテ、勝手ナコトヲ妄リニ「自由」ナドト叫ブモノガアルガ、抑モ自由ト勝手トハ天ト地ホドノ差ガアルノデ、如何ニ咎メル人ガ無イカラトテ、勝手ヲ自由ナドト曲稱スル所謂學者ヤ所謂識者ガ在ッテ、世ノ凡俗者流ヲシテ迷想誤解セシムル樣ナ事ガアッテハ、實ニ天下ノ一大事デハアルマイカ？今左ニ自由ト勝手トノ區別ヲ說明シテ置カン。

「自由」トハ字義ノ如ク「自カラニ由ル」ト云フ事デアッテ「自カラニ由ル」トハ「自然ノ道ニ由ル」ト云フ事デ即チ宇宙ノ眞理タル正善ナル道ニ由ルト云フ事デアル。

「勝手」トハ「我儘」ト云フ事デアッテ、勝手ハ自由ノ正反對デアル。

ろんぐふぉるどハ、世人ガ當然爲スベキ正善ナル事ヲ爲サヌ人ノ多キヲ見テ、痛嘆ノ餘リ左ノ如ク言ッタ。

曰ク「人ハ德義ヲ行フノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「人ハ正義ヲ尙ブノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「生徒ハ敎師ノ敎ヲ守ルノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「世界ノ人類ハ心靈界ノ靈祖タル天照皇大神ヲ崇拜スルノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「人ハ不善者ト離ルルノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「人ハ善事ニ勇氣ヲ發揮スルノ自由ヲ有ス」ト

又曰ク「人ハ職務ノ失態アラバ辭職スルノ自由ヲ有ス」

等ノ格言ハアレドモ「人ハ盜賊ヲ爲スノ自由ヲ有ス」トカ、「人ハ德義ニ背クノ自由ヲ有ス」トカ、「人ハ敎師ノ敎ヘニ背クノ自由ヲ有ス」トカ「人ハ詐欺ヲ行フノ自由ヲ有ス」トカ「人ハ借金ヲ返濟セザルノ自由ヲ有ス」トカ「人ハ惡行ヲ爲スノ自由ヲ有ス」トカ「人ハ醜戀思想ニ感ブルノ自由ヲ有ス」トカノ如キハ格言ダモ無イノデアル、萬一此等ノ如キヲ自由ナドト曲稱曲解シテ犯ス者アラバ、其ハ勝手ト謂フ可キモノデ、斯ル徒輩ノ在ル限リハ到底世界人類ノ平和ハ期シ得ラレナイノデアル、故ニ**勝手ヲ稱シテ自由ト爲スモノハ人類ノ敵、平和ノ賊**デアル事ガ斷定サレルノデアル、苟クモ世界ノ本源地ニ生ヲ享ケ居ルノ自覺アル人々ハ、世ノ誤レル自由稱呼者ヲ見ナタラバ、御互ヒニ懇々ト「自由ト勝手トノ區別」ヲ說キ聞カセル義務ガアルデアラウト信ズル。

因ニ畏クモ　明治天皇ノ御裁下シ給ヘル大日本帝國ノ憲法第二十八條ニ「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限リニ於テ信敎ノ自由ヲ有ス」ト云フ條文ガアル、此文字ノ數ハ尠イガ其意義ハ實ニ深遠廣大ナル最モ尊イ御意デアッテ、迚モ吾々草莽ノ微臣ガ伺ヒ奉ルダニ畏レ多イ事デアル、併シ世ニハ此ノ「信敎ノ自由」ト云フ事ヲ誤想誤解シテ居ル者ガ頗ル多イ樣デアルカラ、吾人ハ何時マデモ默ッテ居ル譯ニハ行カズ、聊カ誤想誤解者ノ爲ニ之ヲ眞理的ニ說明セバ左ノ

通リデアル。

抑モ信教トハ、教ヲ信ズルト云フ事デアッテ、宇宙間ノ至高至貴ナル世界ノ主神タル　天照皇大神ヲ仰ギ信ズルバカリデナク、區々タル數多キ宗教ヲ信ズル事モ信教デアル。而シテ宗教ト云フモノハ如何ナル宗教モ皆是レ世界ノ主神ノ靈使ガ作リシモノデアッテ、即チ世界心靈界ノ靈祖タル神ガ人ヲ介シテ宗教ナルモノハ此ノ世ニ生レタモノデ、恰モ一ツノ高キ山ニ登ルニ幾ツモ道ガアル同然、宗教ノ數ハ幾ラモアルガ登リ着イテ見レバ四邊ヲ見下シ得ル頂上ハ一ツデアル、仁慈寛宏、明德皎々タル　明治天皇ニ於カセラレテハ、此眞理ニ基キ、最モ高キ頂上ヲ知ラントスル者ハ枝葉ノ道モ通過シテ可イ、ト云フ事ヲ即チ「信教ノ自由」ト云フ事ヲ憲法ニマデ記定シ給フタモノト信ジ奉ル。故ニ日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケズ忠義ノ心ヲ少シモ減ゼザル範圍内ニ於テハ、如何ナル宗教デモ信ジテ差支ヘハ無イノデアルガ一ツノ高イ山ノ頂上ニ登ルニ既ニ、日本道ナル立派ナ本道ガ出來テ居ル事ヲ識ッタ人々ハ、別ニ態々枝葉教ノ道ヲ探リ歩カズトモ可イ事デアル、此眞理サイ辨ヘタナラバ、吾人人類ハ世界ノ主神タル　天照皇大神ヲ崇拜スレバ、事足リルデハナイカ。

尚ホ眞ニ世界ノ主神ノ事ヲ能ク識ラントスル人人ハ「世界ノ王政復古」ナル廉價ナ一本ヲ購讀シテ見レバ能ク判ル。

第十一　我田引水ノ用途

「我田引水」ノ字義ハ「我田ニ水ヲ引ク」ト云フコトデアルガ、併シ此ノ文語ハ字義ガ然ウダカラトテ、矢鱈ニ使用シテハ社會ヲ益スベキ文語デハナイ。宜シク常識ヲ以テ或物ノ善惡ヲ判斷シテ、比較的國家社會ノ爲メニ惡イト判明セル時ニ吐言シ、善ノ方ガ勝リテ居ル事ニ對シテハ、吐言スベカラザル文語デアル。

例ヘバ義理堅キ質素主義ノ或農工商人ヤ乃木大將等ガ生前中ニ、信義ノ尊ムベキ說ヤ質素主義ヲ主張シテ、不信義ヤ奢侈等ヲ攻擊タリトテ、其ヲ世人ガ目シテ「我田引水」ト評言スルノハ不可イ。又國家ノ爲メニ熱誠ノ餘リ法律ヲ腦裡ニ顧ミルノ遑ナク、普通ノ犯罪人以上ノ罪名ヲ被リテ身ヲ犧牲ニシタル吉田松蔭先生ヤ西鄕隆盛翁ヤ江藤新平先生ヤ島義勇先生ヤ西野文太郎先生ヤ山鹿素行先生等ガ、生前未ダ其ノ犧牲的行動ノ現ハレザル**凡人ラシキ時代ニ於テ**、若シ「法律ヨリモ至誠ガ尊イ」ト云フ說ヲ立テテ法律ニ恐レル卑怯者ヲ蔑視笑殺シタカラトテ、其ヲ卑怯者連ヤ一般人ノ眼デ以テ「我田引水」ナドト謂フテ可イモノデハナイ。又節操堅キ男子ガ、政界ノ無節操ナル破廉恥漢ヤ、女ニ軟々屈從セル卑劣漢ヤ、自制心ナキ輕卒婦人ナドヲ攻擊シ、或ハ知己トナレル千人ノ女ヲモ肱鐵ニテ擊退セリト主張シタリトテ、其ヲ他眼デ「我田引水」ナド、謂フテ可イモノデハナイ。又堅實ナル人士ガ、田舍人ノ眼ヲ眩惑セシムベキ奸手段ノ誇大ナル建築物ヤ尨大ナル廣告主等ヲ憎言シテ、頻リ